

べさせる物を、もつと粗悪にする外は無い。

その二つの中で、喰べ物の方は以前から、自分でも氣のどがめる程思ひ切つて粗末にしてある上、近頃は炭も茶も室々に備へては置かないで、客が手を鳴らして要求する時持つて行く事にしてゐる位で、此の上ごうにもする餘地が無かつた。つまりこの宿料の値上げが残された方法だつた。けれども、其の値上げも暮に實行したばかりなので、又しても一律にやる事は出来なかつた。彼はいろいろ考へたあげくに、暮の値上げの後で来た客と、婆さんの暗示に従つて、苦情をいひさうも無い客は、夫々宿料を引上る事にした。さう腹はきめたが、流石に何となく心がどがめて、一日二日愚圖々々してゐると、氣の短い婆さんの方から、どう考へをきめたかとせつついて来た。

「私も充分思案してな、ちよつとでも値上げして見る事にした。」

「それ見た事か。初手からあてが云ふた事やないか。」

婆さんは満足して、勝はこつた色を見せた。

「いんえ、私のは貴方のは違ふ。」

一々人のいふ通りにばかりなつては居ない。自分には自分の考へがあるといふ所を見せ度くもあつて、さも名案があるのだといふ風に、わざと言葉を切つてしまつた。

「へえ、どない違ふのや。」

「どない違ふいふて、貴方の云ふやうに、二月續けて値上げするやうな事は私には出来んさかい、今年になつて見えたお客と、三田さんは、うちで一番えゝ室に入つてはるし、貴方も案じる事あるまい云はゝるよつて、此の月から少し増す事にきめた。」

「ふうむ、それが貴方の考へか。儲かる事に遠慮せんかてよろしい。萬遍なくあげたらえゝやないか。けふ日は何處も満員で、他所の下宿に移る事も難しいのやもん、誰が何云ふもので。」

婆さんは自分の折角の入智恵に、多少なりとも變更を加へられたのが氣に喰はなかつた。

「私は貴方のやうな困業な事は出来ん。」

亭主は自分の處置は、ひどく寛大なものゝやうな氣もして得意だつた。

「まあ、えゝわ、えゝわ。わがの損いふ事に氣が付かんのやさかい。」

婆さんは婆さんで、度し難いものは弟の愚圖だと思ふと腹も立つが、自ら自分の優越を感じて胸を静めた。

## 六の六

値上げの問題はきまつたが、來月を待たないで、半ばは過ぎた其の月から——うはく行けば月始めに溯つての事にし度いと思ふので、話をする相手は差當り三田と八疊の軍人の二人きりではあるが、亭主も流石に氣のとがめる節もあつて、切出す迄にはかなり心配もした。先づ軍人の室に行つて、物價の高くなつた事から、商賣の引合はない事をくどくど述べて、どうしても宿料の値上げをしなければ、自分達は飢死するやうな、せつば詰つた話にして承諾を求めた。

「冗談を云つてはいかんね、冗談を。」

若い士官は帽子のひさしの陰だけ白く、その外は眞赤に日焼のした顔をふり向けて、號令をかける時のやうな高い強い聲でいひながら、膝の前の疊を拳固で叩いた。

「最初我輩が此の家に来た時に、あの婆さんは何と云つたかね。離室の二階が當分空いてゐるから其處にゐて構はん。其の室の客が歸つて來る迄には、外のいゝ室が空くと云ふから、なめに別の宿屋に行つてもいゝのだと思ひながら、ついだまされて此處に落ちついてしまつた。然るにだね、離室の客は意外に早く歸つて來る。我輩はこんな室に移轉を命せられる。まるつきり話が違ふのだ。見給へ、欄間には障子も無い、火鉢には火が無い。食物は喰ふに堪へる物も無い。軍人と雖も忍べんではないか。」

其處で又膝の前の疊を拳固で叩いた。亭主は肥つた膝頭の、頭を出しさうな着物の前を氣にしながら恐縮してかしまつてゐた。

「然るにだね。今にして又値上げをしやうといふのは冗談だらう。冗談でなければ云へない筈だ。」

軍人は三度疊を叩いて詰つた。

「まことに相済みまへん。萬事不行届で。」

幾度も頭を下げて揉手をしたり、手の甲で額をこすつたりしたが、

「何分どうも雑用が高くなりましたので。」

と最初に切出した話にかへつて、同じ言葉を繰返し始めた。

「わかつた、わかつた。君のいふ事はわかつてゐる。」

軍人は手をあげて制した。

「しかし我輩は断じて値上げを不當とする。君の方で上げると云つても我輩の方は不承知だ。」

「でも商賣で御座りますので、いやだと仰しやられたら、出て頂く外は無いやうなわ

けで……」

亭主の方もねちねち根強くいひながら、矢張りはみ出して来る膝頭を氣にしてかしくまづ居た。

「何ッ。出て頂く。よろしい。如何にも出やう。誰が居るもんかアハハハハ」

何と思つたのか軍人は胡坐の兩膝を抱へて高々と笑つたが、そのまゝ仰向に寝轉んで、頭の上の新聞を取つて読み始めた。亭主は暫時の間その横着な姿を下眼をつかつて見てゐたが、何時迄たつてもきりが無いので、しびれのされた足を引擦りながら、音も無く廊下にすべり出た。

次には三田の番だつたが、流石に今の一場面で不愉快になつたので、亭主は浮かない顔付で帳場に下つてしまつた。

次の晩亭主は意を決して三田の室を訪れた。最初のうちこそ誰も彼も、怖らしい顔つきの無口の三田をおそれてゐたが、此の頃では段々馴れて、婆さんの如きは彼のお人善しにつけ込んで馬鹿にもし、亭主もそれに連れてくみし易く思つて來たが、いざとなると腹の底に何か潜勢力を貯へてゐるやうな、氣心の知れない所があつて不氣味だつた。胸をどきんどきんさせながら襖をあけると、三田は机に嚙りつくやうな格好で、しきりに洋筆を動かして居た。

「何時も御勉強で。」

「え、いゝえ。」

曖昧な返事をしながら、三田は原稿の手を止めて振かへつた。用があるなら早く云へといふやうな其の様子が、亭主に勇氣をつけた。彼は又物價騰貴から説起して、如何しても再び宿泊料を上げなければならぬ事、それは自分の不本意とする所だが事情詮方無い事を、同じ文句を繰返して述べ立てた。

「暮に上げて、又上げるいふ事は、まことに濟まん事で御座りますが、何分雜用が高いもので。」

最後にはもう一度出發點の物價騰貴に返つてしまふのだつた。

「わかりました。」

亭主の言葉の切れるのを待つて、三田は持前の切口上で云つた。

「私も樂な生活ではないのです。宿料の上るのは大問題だが、正當の理由があれば爲方ありません。今度も亦組合の決議とでもいふのですか。」

「へい、まあ左様云ふたわけで御座ります。何分雜用が高くなりましたので。」

あく迄も諸式の高い事を繰返す外は道が無かつた。又面倒な事になつたかと思ふ不安で、亭主は愈々かたくなつた。

「暮にあげたばかりで、又値上といふのは酷し過ぎるやうだが、一般にやるのなら爲方ありません。組合つてものは有害無益なもんですね。」

意外にも三田の調子には、些かの悪意も認められなかつた。  
「へい、まことに濟まん事で。」

亭主は安心して頭を下げたが、それを見ると三田の方も用事が濟んだのを喜ぶやうに机に向つた。亭主はもう一度頭をさげて引上げたが、相手に感謝する心よりも、手輕に承知した先方を、小馬鹿にしたいやうな得意で胸がいつぱいだつた。

二三日たつと、軍人の方は、突然近所の下宿屋に空間を見つけたと云つて、隊から連れて來た兵卒に荷物をかつがせて引越してしまつた。

「えらさうに云ふても、三圓五圓宿料が上つて逃げ出すやうでは、たいした事もないなあ。」

「そらさうや。貧乏少尉、やりくり中尉、やつと大尉いふ位やもん。士官いふても少尉や中尉やつたらすか見たいなもんや。」

うちの者は口を揃へて悪口をきいた。

「あゝして見ると三田さんはえらいなあ。何もやかましい事云はんど、うむ左様かよしよし云ふてはつた。」

平生無口の亭主も、軍人に罵られた鬱憤から、無理にも三田をほめて見度かつた。

## 六の八

月末の勘定書を三田の室に持つて行つたのはお梅だつた。此の頃は何時でもさうだが、三田は机にむかつてきちんと坐つて、しきりに書き物をしてゐるところだつた。何を書いてゐるのかわからないが、あんまり一生懸命なので、口をきいても悪からうと思つて、ちいさい盆の上に載せた書つけを、机の脚の側迄押やつたばかりで、そのまゝ行つてしまはふとした。

「何？何か用？」

「へえ、いんえ。」

突然三田に聲をかけられて、襖の隙で立止つたお梅は曖昧な返事をしながら、闕の上に乗つてしまつた。

「あゝお勘定か。」

半分體を揺りながら手を延ばして盆を引寄せ、無難作に勘定書を披いた三田の額には、見てゐるうちに立皺が深く刻まれた。

その不機嫌は、略ぼお梅にもわかつてゐた。婆さんや亭主のやり方が間違つてゐるのは知れてゐる。今にも三田の怒つた聲が頭の上に乗えさうで、お梅は身を縮めて疊の五味を拾つてゐた。

「これは間違つてゐやあしないかしら。何時だつたか御亭主が、又値上げをすることは云つて来たけれど、月極めの下宿なら當然來月からの話だらうと思つてゐた。さうでないにしても、正月元日迄溯る事はない。おまけに暮から十日迄東京に行つてゐて居なかつたんだから割引がある筈だね。」

三田は穩かな調子で云ひながら、元の通り勘定書を盆に載せて、お梅の方に押戻した。

「忙しいので間違へたんだらう。」

さうは云はれたが、計算違ひで無い事はわかつてゐた。慾張りから出た仕事なのでお梅は恥ぢて、うつむくばかりだつた。

「まあ階下に行つてさう云つて見給へ。間違ひはあるものだよ。」

そのまゝ又机の方に向いて、肩幅の廣い後姿で、洋筆を取上げた。

お梅はほつとためいきをして立上つた。階下に下りると、婆さんも亭主も女房も、帳場の電燈の下にかたまつて、無駄話をしてゐるところだつた。

「あのなあ、此のかきつけなあ、間違うたらへんか云うてはりまつせ。」

「誰が。」

「三田さんだんが。」

「へえ、三田さんが。左様か。」

さも待構へてゐたやうに、婆さんは平然として煙を吹いた。

「間違ひやおまへん云うたらえゝのや。」

「私にはそんな事よう云えまへん。値上げは來月からが當り前で、その上に東京へいんだ間の割引がある筈やと、こない云うてはるのやもん。その通りやないか。」

「何んぬかす。お前らの知つた事ぢやないわ。帳場で訊ねましたが間違ひはおまへんと。こない云うて來たらよろしい。」

怖い顔をして睨まれて、お梅は思はず知らず後退りをしながら、途方に暮れて、亭主の方に救を求めめる様子をした。亭主は明かにその心持を察したが、取合つては損だと思つて、婆さんの喋るのをいゝ事にして、知らん顔をしてゐた。

「さつさど行て來い。それ位の事が云へえでごないするね。」

婆さんは痾癩聲を振りたてゝ、烟管を固く握り直した。

## 六の九

すごすご二階に上つたお梅は、暫時の間廊下に佇んで躊躇したが、思ひ切つて又襖をあけた。三田は矢張り机に嚙りついてゐた。爲方が無いので、闕の側に膝をついて口をきかうかきくまいかと迷つて、もじもじして居た。

「どうしたい。矢張り間違ひだつたらう。」

三田はいゝ機嫌になつて、目尻に深い皺を寄せてふりかへつた。

「へい、いゝえ。」

お梅は唇が乾いて口がきけなくなつた。

「階下に行つて訊ねましたがなあ、間違ひやないと云ふてはります。」

「間違ひぢやあないつて。」

三田の聲が心持高くなつたので、お梅は胸がどきどきした。

「さうか。それぢやあ其處に置いて呉れ給へ。」

いふかと思ふと机の方に向をかへて、それつきり取つき場がなくなつた。來た時よりも一層悄氣て、お梅は足音もさせずに階下に下りた。

「三田さん、ごない云ふてはつた。」

婆さんは待構へてゐて、姿を見ると直ぐに聲をひそめて聞いた。

「私が間違ひやない云ふたら、そんなら其處に置いてけ云ははつた。」

「ふうむ、そしたら拂はん積りやあか。そんな事もあるまいがなあ。」

「流石に婆さんも不安になつて、一段と聲を低くした。」

「そんな事になると思ふた。最初から私は來月から値上げする方が無理が無うてよろしいと思ふたのに、貴方達がきけへんで面倒な事になつてしもた。」

下の子供のぐつすり寢込んだのを膝に抱いてゐる女房は、白い眼を斜にして、婆さんを非難した。今度の事の一切が婆さんのさしがねで、お人善しの亭主は何を云はれ

ても、へいへいしてゐるのだと思つた。

「何も面倒な事あらへん。お米も炭もごえらい値上げやもん。下宿かて上げん事には暮らしがたゝん。理窟があつてする事が何で悪い。」

平生から仲の悪い婆さんは、相手が女房さんだと思ふと、俄に聲を高くして喰つてかゝるのだつた。

「そんな理窟は世間には通らん。貴方一人の得手勝手や。」

「何ぬかす。わがの亭主と相談してきめたのやで。」

「まあ、そない争はんかてよろしい。みとむないがな。」

口争ひでは我が女房の歩が悪いと思つたので、亭主が横合ひから仲に入つた。

「私が行て、充分納得させて來るわ。」

其の場の喧嘩を逃れるやうに、重たい體を持上げて、亭主は梯子段を上つて行つた。一段々踏む度に、みしり／＼鳴るのを聞きながら、婆さんと女房さんは、怖ろしい



眼付で睨み合つて居た。

## 六の十

「え、今晚は。一寸寄せて頂きます。」

襖の外で聲をかけながら、電燈の光に押かぶさる大兵肥満が、のつそりと室に入つた。

「御勉強中で御座いますが、お梅が失禮申し上げましたさうで、まことに申譯も御座りません。」

おそろしく叮嚀な口をきながら、揉手をしたり、頭を掻いたり、膝頭を撫でたりする相手を不愉快さうに見ながら、三田は洋筆を置いて坐り直した。

「え、甚だ申し悪い事では御座いますが、實は御勘定の事で御座いまして、先日御承諾願ひました通り、今月から少々値上げさせて頂き度う御座いますので……」

如何いふ順序で話したらいいのか、生來の口下手は、幾度となくつかへて唾を飲込んだ。

「そりやあ違ふでせう。値上げは爲方が無いとしても、月の始め迄溯るつていふ理窟は無ささうですね。來月からが當り前ぢやあないかしら。」

三田は意外に物柔かな調子で云つた。

「それで御座います。願ひ致しますのは。早くもしびれの切れて來た足を、もてあましながら。」

「何分諸式が高うなりましたので……」

「いや、その話はわかつてるんです。私のいふのは値上げは値上げで構はないが時期の問題ですよ。それから最初の約束でもあるし、廊下にも貼出してある通り、一週間以上留守にした場合には、多少の割引がある筈ぢやあないんですか。」

生れつき金錢の事を口にするのを非道く羞しがる性質だったが、此の場合黙つて居

るのは、甘んじて馬鹿にされるのと同じだと思はれて、三田は顔を赤らめながら、云ふだけの事は云つて見た。

「へい、そない仰しやられると、まことに申譯も御座りませんが、値上げの方は先日御願ひ致しました時、勿論月の始めからの事と自分では思うて居りましたが、何分口不調法なもので御座りますので、其處のところを十分にわかつて頂く事が出来なんだからと存じます。えらい濟まん事で。」

亭主は太い腕を曲げて、蓬々延びた頭を掻いた。

「それから、割引の事で御座いますが、此の方は前以て手前共へお話が御座いませぬ事には、今日は歸つて見えるか、明日はお歸りに違ひ無からうと、毎日それ丈の用意をして置かんなりませんので、豫めお話のない時には、何分にもお差引き出来んやうな次第でして……」

心の卑しい人間に特有の、やましい事のある時に浮べる一種の愛嬌笑ひを憎みなが

ら、三田は亭主のあだ白い顔を見守つた。黙つて見詰めてやつたら、少しは耻るだらうといふやうな無効果な事を考へてゐた。

「まことに相濟まん事で。」

結局は同じ言葉を繰返して、何時迄たつても相手はその卑しい微笑をやめなかつた。

「濟むとか、濟まないとかいふ話ではない。貴方の方の間違ひでは無く、請求するのが正當だと云ふのなら拂ひますよ。」

「濟んません。」

「つまり此間の値上の話は月始めからの筈だつたのを、私が誤解してゐたといふんですね。」

「濟んません。」

「それから、一週間以上留守ではあつたが、東京に立つ前に、はつきり日數を云つて行かなかつたので、毎日三度々々のお菜もこしらへて待つて居たから、割引けないと

云ふんですね。」

三田はたゞみかけて訊いた。

「つい、まあさう云つたやうなわけになりますので。」

「わかりました。それぢや拂ひませう。」

舌うちするやうな語氣で云ひながら、三田は机の曳出から財布を出して、無雜作に勘定して亭主の目の前に置いた。

「済みません。御氣の毒さんに御座います。」

頭を掻いた手をそのまゝ差延し、叮嚀に札を數へた。

「おほきに。」

胸を撫でおろすやうな形で懷に納めた。

「えらいお邪魔致しました。」

棒になつて曲らない兩脚を引擦りながら廊下に出た。

階下では待ち構へてゐた婆さんが、

「長いなあ、ごない云ふたるのや。」

と聲をかけたが、

「なあに、何でもあらへん。理窟はこつちやにあるのやもん。」

亭主はそれつきり相手にならないで、火鉢の側にゆつたりと胡坐をかいて、今受取つた幾枚かの札を、俺の腕はこんなものだど云ふ風に、一枚一枚ゆつくりと數へて見せた。

七の一

三田が長編小説の完成を急いで居る一方では、田原は押迫つて來た株主總會を前にして、年度決算報告の作成に苦しんで居た。歐羅巴の戦争のおかげで、新設の車輛會社も成績は悪くはなかつたが、何分創立後日が浅いので、最初大株主連中で少くとも

四五年間は無配當で押通して、資産の堅實をはからうと申合せた通り、今期も株主配當は見合せるのが至當だと田原は考へて居た。若し決算の結果多少でも剰餘金があつたら、先づ使用人の爲めに養老疾病積立金の制度を設け度い、ゆく／＼營業状態がよくなつて、株主配當も相當に出来るやうになつたら、其の利潤の一部は職工達にも配分し度い——それからそれと考へを進めて行くと、現在三朱や四朱の配當をする事などは、殆ど問題にもならないちいづばけな事で、差迫つて行ふ可き重要な事は外に澤山あると思はれるのだつた。

けれども有力な株主側には、今度こそはどんなに些少でもいゝから、配當をして貰ひ度いといふ希望が段々強くなつて來てゐた。經濟界の好況で、昨日迄つぶれかゝつてゐたばる會社さへ二割三割の配當はする。ましてや成金會社になると、十割二十割も樂々とやつてのけるのだから、おのづと金錢に對して氣が荒くなつて來るのは自然だつた。

「うちもちつと儲けさして貰はんなりまへんな。」

大株主の中の大株主で、息子を常務取締役に据ゑて居る大藤五郎兵衛は、田原の顔を見る度に、此の言葉を冒頭に、ねちねちと説いて止まなかつた。

「しかし會社將來の大成長を期する爲めには、數年間の無配當は覺悟の前で、最初から皆さんの申合せではありませんか。」

田原は直ぐに眞赤になつて、正面から論争調子でぶつかつて行く。

「ハハ、ハハ、田原さんも未だお若いな申合せは申合せでも、こないなごえらい景氣にならん前の申合せですせ。よう見て御覽。今日世間の儲頭や云はれてる人の誰が此の景氣を豫想しました。誰一人もありませんわ。つゞまり此の景氣といふものは、海の向ふで鼻高さんが喧嘩を始めたおかげだつせ。戦争大明神様の御利益や。神様のお授けになるものを受けんといふ道理はおまへんせ。」

これが大阪切つての商人で、會社屋で、口きゝなのかと思ふと、既に田原は公憤を

さへ感じるのだつた。

「けれどもうちの會社は先々順調に行つてるといふ丈で、一割二割の配當をする程儲けてはゐませんから……」

「それぞれ、其處が經營者の手腕の見せどころや。本來四朱五朱の配當がぎりぎりでも、無い所から儲をしぼり出して、一割にし一割五歩にするのが當節ですせ。私は決して無理は云はん。不景氣時代やつたら爲方も無いが、此景氣はまだまだ續きまつせ。」

「しかし蝟配は……」

「そのしかしが貴方の玉に疵だんなハハ、ハハ、」

世間でいふ大五の大將は、酒さびの出た赤ら顔を崩して腹を抱へた。

「人間はそないな堅苦しい事ばかり云ふとつては世間は渡れへん。今夜は私が案内するさかい、ひとつ景氣よう飲みましょか。」

まるつきりかけ違つた二筋の道を、かけつこしてゐるやうな張合ひの無さに、要領を

得ずに終る事が多かつた。

## 七の二

田原は外の株主を動かして、自分の主張を通さうとも試みたが、誰に逢つて見ても云ふ事は同じで、蝟配當でもなんでもいゝから、是非とも配當して呉れなくてはやり切れないと云ふのだつた。押問答をしてゐるうちに決算は済んで、總會に提出する利益金處分案の作成が、力量に餘る田原の仕事だつた。彼は結局苛々する腹の盡を押殺して、二つの案を立てた。一つは自分のおもふ通りのもので、彼は理想案と呼んだ。もう一つは有價證券の評価などに細工をして——自分が進んだのではないから、細工をするのを黙認してといふ方が至當かもしれない——五朱の配當をする事にした。これを妥協案と呼んだ。

重役會の席上では、大五の息子を中心にして、みんなが理想案を時宜に適しないも

のとして排斥し妥協案に更に修正を加へて、配當率を六朱にしやうと主張した。それに對して田原は、自ら密かに得意とする熱辯を振つて、目前の小利益の爲めに行動する事は眞の事業家の爲すべからざる事であると力説したが、多勢に無勢で敵し難く、遂に配當の實行は可決された。但し配當率に就ては意見區々で、その日は最後の決定を見ず、再開を約束して散會した。

自分の思ふ事の通らないむしやくしや腹で、田原は一直線に自宅へ歸らうと、机の上の書類をかたづけ、外套を着て身支度をしてゐると、

「専務さん、電話です。」

と給仕が呼びに来た。

「あゝ、もし〜、貴方田原さんですか。」

おもひもかけない大藤五郎兵衛の皺がれ聲が、受話器を通じてづきん／＼響いて來た。毎日々々會社の用事で寸閑もない勞苦をねぎらふ爲め、且又時事問題についても

高説を拜聴し度いから、北の新地の或る茶屋へ來ては呉れまいかと云ふのだつた。

「粗末な食事を差上る丈です。貴方もさう毎日奥さんの御機嫌うかゞはんかてよろしいが、ハハハハハハ。さいなら、待つてまつせ。」

こつちには口を開くひまも與へず、電話をさそくに切つてしまつた。

「困つたなあ。」

田原は一人で舌うちしたが、これもつとめだと思ふ心もあつて、指定された場所に進まない足を運んだ。

彼は元來茶屋酒を好まなかつた。酒の弱いせいもあつたが、持つて生れた道徳と切つても切れない羞しがりで、はれがましい場所は禁物だつたのだ。時たま三田に誘はれて、あと引上戸の相手もする事はあるが、そんな時も二人で勝手に喋つてゐた。女氣は無い方が多かつた。あかるい軒燈の並んでゐる新地に足を踏入れた丈で、既に動悸が高くなつた。

門を入つて、敷石に靴の踵のこつこつ鳴るのを氣にしながら玄關にかゝると、  
「お越しやす、お待兼でいらつしやいます。」

出迎へた仲居は名前もきかずに、帽子を受取つてさつさと先に立つて案内した。二つ三つ折曲つた廊下の奥の座敷の、あまりにあかるい電燈の下には、大藤五郎兵衛一人かと思ひの外、たつた今迄重役會の席上で議論をたゝかはせた連中が、づらりと顔を揃へてゐた。

## 七の三

「さ、づうつどこつちやへおいで。」

すつかり舞臺について、まるで自分の家にもゐるやうな樂な顔をして居る大五の隣席に、田原は否應なく坐らされてしまつた。直ぐにお膳が出て、客の數よりも多い藝妓や舞妓が、立つたり坐つたり、入れ替り立ち替り、座敷の内外を動き廻る。その

とてこてした衣裳や化粧の色彩だけでも、田原は酔つ拂つてしまつたらしい。一座の中でたつた一人、自分を除いた他の者が、いかにも場馴れた様子で、馴染の女と目や口で、話をしたりふざけたりしてゐるのが、憎らしい程羨しかつた。女と口をきいてるのが羨しいといふよりも、自分とは違つたおちつきを見せてゐるのが羨しかつたのだ。それ程彼は面喰つてゐた。

「田原さん、ひとつ貰ひませうか。」

多勢の女を前に集めて、猥談の合間々に高笑の聲を響かせてゐた大五が、先づ人の悪い微笑を浮べながら、献酬を強ひると、後から後から一座の者も、わざわざ立つて来て盃をさすのだつた。

「僕は駄目です。許して下さい。もう目がちらちらして來ました。」

紅生薑のやうに眞赤な顔をして田原は途方も無い大きな聲で、ひつきりなしに集つて來る盃を拒んだ。

「まあ、そない云はんかてよろし。貴方やつたら介抱し度い女子が仰山のまつせ。」  
無理に盃を押つける大五の言葉につれて、

「私介抱させて貰ひまつさ。」

「介抱さして欲しいわ。」

左右から若いのが臆面も無く黄色い聲を張あげた。

「ほんまにえゝ男振りやなあ。私かもひとつ若かつたら、外の人には指も觸れさせはせんをやがなあ。」

生際のまるつきり扱上つた婆さんは、真正面からしげしげ見ながら、それが全く心からの嘆息に聞える驚く可き技巧を以て、一層場面を賑かにした。

「いや、かなはん、かなはん。婿さん一人に嫁八人や。」

「お互年寄はあさまへんな。よう噛みしめたら、えゝ味がするのやがなあアハハ、ハハ、」

誰が喋つてゐるのかわからない程、田原はすっかり酔つてしまつた。妙にはめられる羞しさど、冷かされてゐる腹立たしさの入りまじつた頭腦の中は、酒が泉になつてもく／＼湧き上るやうに、づきん／＼響くのであつた。

「どうだ、お前も田原さんに岡惚れか。私の方がよからうが。」

太い聲に氣が付いて、崩れた膝を坐り直した田原の前に、お銚子を持つて來た若いすぐれて綺麗なの腕をつかんで、大藤五郎兵衛は引寄せようとした。

「あれえ。」

力任せに引かれて、堪へればかへつて倒れさうなので、おとなしさうな女は、両手にお銚子を抱へたまゝ、するする膝で疊をすべつて、大五と田原のお膳の間に、危く體を置く丈の位置を見付けた。

「満更いやではあるまいが。」

いゝ年をしたのが、ちつとも酔つてゐないくせに酔つたふりをして、相手の首に手



をかけた。

「いやあ、かんにん。」

身をもがいて逃げようと半分立ちかけたが、滾すまいと両手でお銚子を抱いてゐる上半身の中心がとれないので、裾がからんでがつくり膝頭をついた拍子に、前のめりに田原の胸に倒れかゝつた。

「あれえ。」

といふ聲の下から、とくとくととといふ音をさせて、強い香と共に酒は容赦なく徳利の口からあふれ出した。

七の四

「えらい濟んまへん。堪忍しとくれやす。」

田原の胸から膝へかけて、ぐつしより濡らして湯氣を立ててゐる酒を、半巾で拭き

ながら、泣き出しさうな顔をして詫びた。

「いかん、いかん。どえらい粗相しよつて、口先ばかりであやまつたかて許しはせんぞ。心からあやまつた證據には此のこつぶで一杯飲め。」

太五は手近にあつたこつぶを取つて、若い妓の手に無理に受取らせた。

「え、男に見とれて、思はず知らず倒れかゝつたんやろ。」

「罰杯だ。罰杯だ。」

あつちからもこつちからも面白半分にからかふのであつた。

「さあ、早う飲んで、堪忍して貰ふたらえ、やないか。」

婆藪者は面白づくの大五に媚びて、若いのが膝の上にもてあましてゐるこつぶに徳利の口をさしつけた。

「姐ちゃん、あて飲まれへんわ。」

なさげも無くなみなみと注がれたこつぶを電燈に透かして、若いのは力の無い聲で

嘆息した。

「そんなに云はんと飲みなあれ。」

「半分は田原さんがすけて呉れるさうだ。お前とならば何處迄もつてねアハハ、……」

女も男も、一座の者は無責任な口をきいて笑つた。田原は酔が頭に上るのを感じながら、人の悪い、下素な奴等に對して義憤を發してゐた。

「さ、早う飲まんか。飲まんと田原さんが堪忍せん云うてはるせ。」

大五は自分の云ひ出した事をきかない女が癪に觸ると云ふ風で、怖い顔をして、聲が高くなつた。

「そんなら私飲みまつさ。あんたはん半分助けとくれやす。」

女は觀念して、もう一度こつぶを透かして見てから、田原の方に顔を傾けた。

「よう、よう。えらもてやなあ。」

誰かゞいちちやくはやくはやし立てたので、酒は澤山飲めないからと、斷らうと思つてゐた田原が口を出すひまも無かつた。

「ほんまに助けとくれやす。」

此の外には頼む人はないと云ふやうな氣勢を見せて、女は田原に力強い目ざしを投げると、何の躊躇も無く振仰いだ。

「しんど。」

一息に飲み干しさうな勢だつたが、半分にも及ばないうちに參つてしまつて、苦しむ息をついた。

「なんや、も一息やないか。」

又傍から意地の悪い聲をかけられたので、女は再びこつぶを口に持つて行つたが、一寸臭ひをかいたばかりで胸がつかへてしまつたらしく、直ぐにこつぶを膝におろした。

「あんたはん、助けておくんはなれ。」

思ひあまつたやうな様子をして、田原の方に向き直ると、真正面からこつぶを目の前に差出した。田原は目が眩む程酒の臭に鼻をつかれた。

「田原さん、こりや男として、あんたも飲まんなりめへんで。」

「矢張り若い人がもてまんな。」

俄に一座は陽氣になつて、口々に勝手な事を喋るのが聲と聲とぶつかつて、一際田原の頭をかき亂した。

「よし、飲んでやる。」

其の場にあるすべての人間に對する疇癢まざれに、彼は何かしら荒つばい事がしてのけ度かつた。女の手からこつぶを取ると、もう目が見えない程酔を感じた。しくじつたかなど、一瞬間思ひはしたが、えゝ畜生と思ひ直すと、高く捧げたこつぶの酒を飲み干した。

「美事、美事。」

「えらいぞ、大將。」

又ひとしきり、はやし立てる聲も、何を云つてるのかわからなかつた。田原は鼻をつく酒の臭ひにひとたまりもなく咽せかへつた。

七の五

夜中に氣のついた田原は、馴れない蒲團の肌觸りに驚いて、ものうく疲れた目をみひらいた。薄紫の覆のかゝつた電球の鈍い光の中でも、それが席貸の奥の小部屋だと云ふ事は直ぐ分つた。骨も筋もなくなつてしまつた體は、ふかぶかどかけた夜着に壓されて、今でも酒に濡れてゐるやうに汗ばんでゐた。無闇に咽喉が乾くばかりで、五體には知覺さへないやうな氣持がした。暫時は身動もしすにはんやりと電燈に目を据ゑてゐたが、乾きは益々ひどくなつて、呼吸も苦しくなつた。枕頭の水瓶を求めて、

やつとこさで半身を起した時、彼は始めて背中合に寝て居る女のあるのを知つた。酒の酔が又もりかへして來てくらく目が廻つた。彼は枕に額をつけて突伏してしまつた。

「貴方、ごないしやはりましてん。」

身じろぎに目を覺ましたのであらう、女は素早く起返つて、田原の肩に手をかけて覗き込んだ。熱い息が襟首にかゝつて愈々咽喉が詰つてしまつた。

「水を呉れないか、水を。」

又吐氣を催して、田原はうは言のやうに叫んだ。

「お冷だつか。」

女の起上る氣配に續いて頭の上で、水瓶からこつぶに酌ぐ水の音が、待ち切れない程なつかしく聞えた。

「はいお冷。」

田原は振仰いで喰ひつくやうにこつぶに口をつけた。冬の夜の水の味は、固く鋭く咽喉を通つた。

「難有う。」

がつかりして又枕に頭をつけて目をつぶつた。女の長襦袢の緋の色が、目をつぶつても險のうらにこびりついて居た。ふと我家の事を考へたが、それを追及する丈の氣力は無く、再び睡りに落ちてしまつた。

一度死んだ者が蘇生したやうな、昨日だか今日だかわからない氣持で、翌朝田原が頭を上げた時は、何時の間にか縁側の雨戸はすつかりあいて、障子には朝の日が白々とさして居た。あんまり明るく照らされてゐる腑甲斐なさを腹立たしく思つたが、夫よりも頭の痛むのは堪へ難かつた。同じ夜着の中に寝て居た女の姿は見えなかつたが、枕頭には金盃があつて、昨夜吐いたものであらう、ごろごろに澱んだ物が、腐つた臭ひを漲らして漂つて居た。その臭ひが鼻を刺すと、又しても咽喉元迄むかむか込

みあげて来た。唇を噛んで堪へながら目をつぶつた。ひどく疲れてゐるので又睡つてしまつた。

微かな物音に誘はれて薄目をあいて見ると、目の前に昨夜の女が坐つて居た。

「まだ具合悪うおまつか。」

綺麗に化粧の出来上つた顔をさし寄せて聞いた。田原は口をきく元氣がないので、頷いて見せる積りだつたが、それさへ首が自由には動かなかつた。彼は自分を憐れむやうな笑を浮べた。昨夜は氣がつかかなかつたけれど、一重險のはればつたい娘らしい顔立ちの女で左の目尻にちいさい黒子があつた。

「もちつと寝てはりまんの。ちきにおひるになりまつせ。」

「おひるに。もうそんなかい。」

反問して見たけれど、さりとて體を動かす力は無かつた。

「もう少し寝かしといて呉れ給へ。」

「さうだつか。そんなら私あつちで遊んで來ても大事おまへんか。」

悪氣の無い調子で言かれて、田原は笑ひながら、やうやく顎で返事をした。女はそのまま立上つて、室の外に出て行かうとした。

「君の名は何ていふの。」

「え、私だつか。」

呼止められて振返つて、

「葉牡丹いひまんね。けつたいな名前だつしやろ。」

笑顔で答へて、そのまま、奥の外に消えた。

七の六

田原は午後になつて漸く床を離れた。

「昨晚はえらいお苦しきうにおましたなあ。」

大丸番の仲居は湯殿に案内しながら、如何に田原がもがき苦しんだかを、身振を入れて面白さうに話した。

楊枝を使ふのさへものうく、浴槽の中に身を浸して居ると、そのまゝ深い水の底に沈んで行く氣持がした。自責も悔恨も何も無かつた。もつともつと體を横にして、ほしいまゝに安逸を貪り度かつた。

湯から上ると、別の廣い座敷に通された。糊の匂のふんとする湯上りの上に丹前を着て、座蒲團の上に胡坐を組んでは見たが、體の中心がとれないで、引くりかへりさうな氣持がした。

「お早うさん。」

夙くにゐなくなつたらうと思つてゐた葉牡丹が、にこにこしてやつて來た。

「おや、君はまだゐたのかい。」

「へい、お目覺を待つてゐましてん。」

側に來てきちんと坐つて、たつた一晚で筋肉のたるんでしまつた田原の顔を、甘つたれるやうなからかふやうな目ざしで見た。

「なんぞ召上るものは。」

「とても駄目だ。腹は空いてるんだけど喰べれば屹度又やるね。」

田原は想像する丈でも、胸を壓される感じがした。

「それよりもそろそろ歸らなければならぬ。」

「まあ歸りはりまんの。」

「あゝ、君には大變世話になつたね。何時かお禮をしよう。」

彼は眞面目に感謝した。酔拂ひの介抱をさせたのが、自分の醜體を耻る氣が強い丈、ひとかどの大役のやうに考へられるのだつた。

「お世話も何もあれしまへん。私先きにやすんでしまひましたわ。」

「いゝや酔拂ひつて奴は手がかゝるからね。ほんとにお禮をしなくちやあ濟まない

よ。」

「お禮なんていふたら笑はれまつせ。それよりも、もつとゆつくりしてゐておくんなはれ。」

田原には相手の舌たらずのやうな口のきき方迄が善良に聞えて、どうとめもない事を話してゐるのが悪い氣持では無かつた。けれど段々元氣が回復して來ると、昨夜からの不始末と、現在自分が如何いふ位置にゐるかといふ事が、やうやくはつきりして來た。飲めもしない酒を強ひられて、よせばいゝのにしまひにはこつお酒迄飲んだ光景が、苦々しく目の前に復活して來る。同時に今迄まるつきり忘れてゐた会社のことが、突然意識にのぼつて來た。さうだ、會社に行かなければならなかつたのだと、後悔の念は此の時著しく勢力を増して迫つて來た。妻の顔も子供の顔も、大藤五郎兵衛や會社の給仕の姿と一緒にちらちらした。

「貴方、何考へてはりまんの。えらいしゆんではりまんな。」

素牡丹に聲をかけられてはつとした。

「しゆんでもゐないが一寸社にも顔を出さなければならぬし、そろ／＼歸らうかと  
思つてね。」

さう云ひながら、どうしても體がだるくて立上る勇氣は無かつた。どの面さげて今頃會社に行かれるものか。曾て一度も他所に泊つた事の無い自分を、妻と子供はどう思つて居るだらう。毎日夕方會社から歸る父親を待たせて、玄関に駈出して來る女の子の姿が今の田原には觸れ度ないものに思はれた。行く所も、歸る所も無い一身をもちあました時、彼はふと友達を思ひ出した。今迄全く忘れて居た友達が無上になつたかしかつた。

「あのねえ、東の〇〇〇番に電話をかけて、三田さんといふ人を呼出して呉れ給へ。」

田原が是非あひ度いから、歸りに此處に寄つて下さいつて。」

「三田さんいひまんの。」

「あゝ是非来てくれつてね。」

うなづいて立つて行く葉牡丹の姿が見えなくなると、彼は又壘の上に腐つた體を横倒しにした。

## 七の七

夕方、三田がやつて来た時、華美な友染縮緬のかけ蒲團をかけた置炬燵の中に眠つてゐる田原の傍に、たいくつさうな顔をして葉牡丹は獨骨牌をして居た。

「貴方、起きとくんはなはれ。お客さん見えませんでしたせ。」

狼狽て、骨牌を寄集めて、田原の肩に手をかけて揺振つた。

「大した景色だね。」

やうやく目を開いて、大儀さうに身を起す田原を見下して、三田は皆目様子が解せなかつた。

「三田公。」

田原はきちんと坐り直して、感慨に堪へない心持で友達を見た。その手を取つて抱きついて、力になつて貰ひ度かつた。目には涙さへ浮び兼ねなかつた。

「俺は駄目だ。すつかりやられちやつた。まるでなつてゐないのさ。」

昂奮して、そのくせ體にも心にも緊張を缺いて悄氣て居るのが、ふだんの元氣のいゝ高調子とはうつつ變つた力の無い聲で、昨夜からの顛末を話した。重役會の事、大五に誘はれた事、此の家に来た事、酒を飲まされた事、飲めもしないのに飲んだ事、結局吐いて吐き倒れた事、そのまゝ一夜あけた事、今日は終日頭が上らないで寝てゐた事、それからそれと話をしてゐるうちに、味方を得た嬉しさを感じ始めて、彼も元氣を回復して来た。

「ふうむ。盛りつぶされたのか。古い手だなあ。」

三田は聞き終つて嘆息した。年が年中、口を開けば世間の惡を攻撃しながら、しか



も世の中に氣を許し切つてゐる善良な友達に同情した。こんな男をつかまへて、陥穽に引擦り込む奴等を憎んだ。

「馬鹿だなあ、君も。」

「俺か。さても馬鹿だよ。」

田原は始めて聲を出して笑つた。

「おい、お酒を貰つて來て呉れないか。三田公は酒飲みだからね。それから誰か、君の仲よしでも呼んで貰はうかな。」

「えらい元氣だな。」

二人の話を黙つて聞いてゐた棄牡丹も、所在なさから逃れる事が出來て、氣輕に立上つた。

「あれは何だい、矢張り陥穽かい。」

廊下の足音が遠ざかると、三田は笑ひながら云つた。

「冗談云つちやあいけない。」

「だつて昨夜からつきつきりなんだらう。つまり一緒に寝たんだらう。」

「夜中に目が覺めたら並んで寝てゐるんで驚いちやつた。」

羞しがりやの田原は、血の氣の抜けた青ざめた顔を染めて答へた。

「しかし大丈夫だよ。」

「そりやあさうだらう、君の事だから。けれども誰が大丈夫と思ふものか。少くとも大藤五郎兵衛は大丈夫とは思はないね。」

「そいつあひごいぞ。」

「ひごいつたつて爲方があるもんか。飲めもしない酒なんか飲まされるからいけないんだ。」

三田は疊みかけて詰つた。しつかりしろと氣勢を添へてゐるやうな調子だったが、田原は全く沈黙してしまつた。道德家の彼に取つて、それは手痛い事だつた。明日は

顔を合せなければならぬ同僚の思惑が氣になつた。それよりも、妻も自分を疑ふだらうかといふ考へが田原を苦しめた。

それでも酒が出て、三田がうまさうに飲んでゐるのを見ると、何事にも誘はれ易い性質で、つい自分も盃を手にし、迎酒に元氣を得て、朝からの空腹と疲勞に、饅頭を喰べて蘇生のおもひをした。

## 七の八

温良な妻は、納得したかしないか心の底は疑はしかつたが、兎に角一夜の外泊の一部始終を話して、表面丈は無事に済んだ。

疲れ切つた體には、我家程氣樂な處は無かつた。何から何迄聞き度がる妻の質問を避ける爲めにも、田原は睡つてしまはなければやり切れなかつた。

ぐつすり寢込んだ翌朝、何時もの通り起されて、顔を洗ひ、食事をし、洋服に着換

へる迄はそれ程でも無かつたが、愈々出かける時間になると、どうしても氣が進まないで、面白くも無い新聞を、読みもしないのに讀んでる格好をして開いて見てゐた。彼は會社に行つて常勤の取締役に顔を合せるのが厭だつた。

「もうお出かけにならないといけませんよ。」

さう云つて促す妻の言葉は、今迄にも度々聞いたのだが、その朝に限つて、ひどく意地悪く聞えた。

「行く時になれば行くよ。」

突慥貪な口をきいて、やつとの事で尻を持上げた。

何も自分には後暗い事は無いのだと思ひながら、會社の門をくぐるのが怖いやうな氣持がした。門衛の禿頭の爺の目尻の下つた目つき迄、たゞならず自分を見てゐるやうで、先方が帽子を取るのに先達つて自分の方から挨拶した。

毎日々々、一日の大部分を其處で費す事務室の大机を前にして、廻轉椅子に腰を下

したが、たつた一日缺勤した丈なのに、彈機のはいつた椅子の坐り心地さへ、不馴れなものゝやうに感じられた。しかし、朝の日光のさしてゐる中庭を距てた向ふの工場から聞えて來る機械の音は、矢張りなつかしいものであつた。彼は此の二三日の事は一切夢だつたのではないかと思ひながら、茫然として頬杖をついてゐた。

「お早う。」

後から聲をかけて、柔かに肩を叩いたのは同僚の大五の息子だつた。

「昨日は見えませんでしたね。引きとめられて流連の、と云つたわけですか。ハハハハ……」

提琴で日本の音曲を弾いて、藝者の三味線と合せるのが何より自慢の若大將は、持前のいやにねばつこい物越で、田原の顔をのぞき込んだ。

「冗談ぢやない。そんな事があるもんですか。」

口ではきつぱり云つたけれど、耳の根迄も赤くなつて、田原の胸は高く波打つた。

「えらいもて方だつたさうぢやありませんか。おやぢが歸つて來て云つてゐましたよ。若い人にはかなはないつて。」

相手が面白ければ面白がる程、田原は全く不機嫌になつて、返事もしずに座を立たうとした。

「あ、一寸々々。」

呼びとめて、追かけて來て、

「昨日は御出でがなかつたですが、あんまり長引かしても置けないので、例の決算報告の件ですね、あれを今日の午後片づけてしまひ度いと思ひましてね。實は皆さんに集まつて頂くやうに取計らひました。どうせ今日はお見えになると思ひましたから。御異議はありますまいね。」

大 阪  
早口に喋る相手を見返つて、田原は無言で領いたまゝ、何の目的も無いのだつたが  
急いで工場の方に立去つた。  
247

午後から集まつて来た重役の一人々々が、同じやうな言葉で田原を冷かした。

「どうも先夜はすつかり見せつけられましたな。」

「今度めは田原さんにおごつて貰はんならん。」

口々にいふ中で、

「大五の大將も例の箸まめで、密かにねらひをつけといたのに、葉牡丹ですか、若い可愛らしいのを、まんまと田原さんに占められた、年はとり度ないものやつて大笑ひでしたせ。」

誰憚らぬ高調子で喋る一人につれて、一座の者が一齊に笑つた時は、田原は憤りに堪へられず、目頭に涙を浮べて、唇を噛んだ。

それつきり彼は口をきく氣持を失つてしまつた。重役會の重要案件である配當案は誰一人不賛成を唱へる者もなく、大五一派の希望通り、年六朱と決定した。

## 八の二

からつ風が吹き、寒い雨が降る冬の間、隙もる風の容赦なく吹込む下宿の建てつけの悪い室に、火の氣も乏しく暮したが、何時の間にか裏庭の柳の梢にもうぶ毛のやうな新芽の頭が出て、机を据ゑた窓の外の景色も段々春めいて來た。三田が新聞に出す長編小説も、其の頃漸く前編の終りに近くなつてゐた。

その新聞の夕刊に現在出てゐる小説は、近頃賣出の作家の作品だつたが、宗教を表看板にして、實は性慾を取扱ふのが特色で、學生——殊に女の學生に多數の讀者を持つてゐて、あつちこつちの雑誌から引張風になつてゐる爲め、一回々々書いて送る新聞の方は、兎角原稿が間に合はず、體裁許り氣にして嘘をつくのは當然と心得てゐる新聞も、最初のうちは作者を病人にしてごまかして居たが、紙面の配列にも困るので三田の小説が出來たらば、その方は中絶にしてしまひ度いと云ふ意嚮だつた。

三田にとつても原稿を金にかへる事は必要だつた。暮の賞與金で一息つくにはついたらけれど、それも世間並はづれて少なく、長く懐に残る筈はなかつた。その上毎月の月給では、どうしても収入より支出の方が多くなる勘定なので、不時の稼ぎがなくてはやり切れなかつた。彼は新聞社の催促に餘儀なくされたやうな顔をしながら、自分でも完成を急いでゐた。夜は大概一時頃迄筆を放さず、頭が疲れて捗らなくなると、雨の降る日でも往來を出て近所を一巡して來た。日曜も祭日も、殆ど机に嚙りついてゐた。

「何してはるのやろ。えらい勉強やなあ。」

婆さんも感心して、その勉強が何であるかはわからなかつたが、外の室に行つても話の種にしてゐた。

「三田さん、貴方何書いてはりまんの。」

しまひには好奇心が動いて、本人にも聞いて見たが、

「無駄書です。」

といふ簡単な返事で二の句がつけなかつた。小説を書くといふから小説に違ひ無い。小説とすればどんな小説だらうと想像すると、一度は覗いて見度かつた。或晩三田が散歩に出たのを見計らつて、机の抽斗をあけて見たが、ばら／＼の原稿紙に讀悪い釘のやうな字で書いてあつて、殆ど讀むに堪へなかつた。婆さんは忌々しい物を見たやうな氣持がして、舌うちをして元にかへした。その時抽斗の中に、確に金の入つてゐる財布と墓口が、無難作に、ほうりこんであるのを見た。金を大事にする婆さんは、自分自身が粗末に扱はれたやうな氣持がして腹が立つた。こんな事をして置いて、盗られたつて知るものかと、口に出して云つてやり度い氣持だつた。おのれの心の上に絶大の魅力を以て壓迫<sup>おしこま</sup>る金は原稿よりも遙に婆さんの興味であつた。あたりを憚りながら、財布と墓口をあけて見た。意外に兩方とも中身は少かつた。婆さんはその中身の少いのに安心して、元通り抽斗に納めて室を出た。

日曜の朝であつた。三田は目が覺めると直に、向の湯屋に出かけた。何時も抽斗に入れて置く墓口の中には湯錢丈の小錢が無く、一番細かいのは五十錢札二枚だつた。石鹼箱と手拭と、その一枚を一緒につかんで出た。番臺に坐つてゐる娘の、眞白に塗りつぶした顔には、明かに釣錢を出すのを厭がる表情が浮んだが、別段何もいはず、汚ならしい十錢札に銅貨をませて呉れた。

浴槽の中に首迄つかつて、今日一日で何枚位書けるだらうと、又しても原稿の事を考へて居ると、

「お早う。」

と聲をかけて、同宿の貯蓄銀行員が入つて來た。

「近頃はえらい御勉強ださうですが、何か洛陽の紙價を高めるといつた傑作でも御出

來ですかな。」

口先も氣分も重い三田は、平生同宿の人とは口をきいた事も殆んどなかつたので、話かけられると、どぎまぎしてしまつた。

「いゝえ、つまらないものなんです。」

「結構なおなぐさみですな。しかも近頃は原稿成金といふのもあるさうぢやありませんか。資本無しで儲けるんだから、これ程ぼろい商賣はありませんな。」

三田はそれには構はずに、流場に出て頭からやけに水をかぶつて居た。夜もろくに眠らないで苦心して居る創作を、ぼろい商賣だと一口にいはれたのが腹立たしかつた。

「お早う。」

話しかけられる話を逃げて、さつさと上つてしまつた。

下宿に歸つて、梯子段を上り、暗い廊下を離室の方へ歩いて行くと、その足音に驚いたやうに、自分の室から出て來た人の姿があつた。酒屋のおかみさんの連れて來た

小娘のおれんだつた。ちらと三田の方を見たが、狼狽へて廊下に置いてあつた水手桶を持ち上げると、物も言はずに擦れ違つて行つた。拭掃除の雑巾の漂ふ濁つた水は、だぶだぶ波打つて、ふちを溢れて廊下を濡らした。三田は爪先を立て、歩いた。

机の前に坐ると直ぐに、袂の中に入れて置いた釣銭をしまはうと、抽斗の中の墓口を取出した。銀の金具をばちんとあけると、先刻あつたもう一枚の五十銭札が無い。直覺的に、彼の頭脳には、おれんの妻がひらめいた。念の爲めに抽斗の中を覗き込むやうにして掻き廻しても見たし、ありつこないと知りながら袂の中も探つたが、探しながらも其の所在は、おそろしく目差の伶俐な、少し猫脊の小娘の帯の間の外には無いと考へられた。困つた事になつたぞ、と思ふと既に動悸が高く打つた。

この場合、三田は盗まれた事を、惜いとも残念とも思はなかつた。たゞ迷惑だと思ふのだつた。黙つてゐれば、盗んだ奴が馬鹿にして、益々増長するだらう。盗まれたといつて事を表沙汰にすれば、盗んだ奴は糾問され、ひどい目に逢はされて、かへつ

て根性を曲げるだらう。どつちの道を選ぶにしても、結局自分は迷惑な地位に陥らなければならぬ。三田は自分の不決斷が腹立たしかつた。つまらない事におもひ迷ふ自分よりも、平氣で他人の物を盗む事の出来る人間の方が、一層偉いと思はれた。

## 八の三

三田が前後の處置におもひ迷つて居るところに、朝のお膳を持つてやつて來たのは婆さんだつた。決し兼ねた心の中を見透されるのを怖れるやうに、三田は狼狽へて墓口を抽斗の中に投げ込んだが、相手はそれを見逃さなかつた。

「貴方まあ、そないな處に財布やら何やら入れてはりまんの。」

ちやんと承知して居ながら、さも初めて氣が付いたやうな様子で、驚いて見せた。

「若し失つたらごないします。」

たとへ他人が他人の物を取扱ふにしても、それが金銭なら粗末にさせては置けない

性分だから、自ら詰責する調子だった。忌々しくて堪らなかつたのだ。

「實はもう失つてしまつた。」

三田は苦笑をして答へた。いはうかいふまいかと迷ふ暇も無く、誘ひ出されて白状した形だった。しかも重荷を下した氣持がした。

「えッ、財布が無うなりましたのん。」

澤山は入つてゐない事を知りながらも、婆さんは思はず大きな聲を出した。

「なあに、五十錢一枚なんだ。」

あんまり一方が乗り出して來るので、三田はいはなければよかつたと後悔しながらまぎらかしに箸を取上げた。

「今朝湯に行く前に墓口の中にあつたのが、歸つて來るとなくなつてゐるのさ。もともと鍵もかゝらない抽斗の中に放り込んで置く方が悪いんです。」

「さうだつしやる。そやさかいに……」

それだから危ないと思つてゐたんだと口に出かゝつたが、自分が一度その抽斗を開けて、財布も墓口も中身迄あらためた弱味があるので、氣が付いて口をつぐんだ。

婆さんの頭腦にも、直ぐさまおれんのこまつちやくれた姿が浮んだ。酒屋のかみさんが最初から連れて來るのを躊躇し、危ぶんだ手癖が出たなど思つた。くるくる働いて、年こそ行かないが、お梅などよりも萬事の飲み込みがよく、教へないでも一人前の事をするのが氣に入つてゐたのだが、流石にこれには婆さんも弱つた。

「うちで物がなくなつたといはれたら、ほんまに申し譯がおまへんが、三田さん、貴方お勘定違ひやおまへんか。」

「いゝえ、五十錢札が二枚あつて、その一枚を持つてお湯に行つたんだが、歸つて來てお釣錢をしまはうとすると、もう一枚の奴がなくなつて居るのさ。しかし兎に角此方の不注意です。自業自得だ。」

三田はもう面倒な問答は打切にしたかつた。これだけいへば、盜まれて黙つてゐて



馬鹿にされる不愉快は、既に免れたと思つた。それで十分だと思つた。彼は残りの御飯にお茶をかけて、一気に流し込んで箸を置いた。

「いゝえ、お客さんの物が無うなつて、そのまゝにしとかれしめへん。私の家で起つた事やさかい、調べるだけは調べん事には申し譯が立ちまへんわ。」

なるべく強くいふのが、自分の身の潔白を示す様な氣がした。

「まあ、うつちやつといて下さい。たつた五十銭の事だから。」

「いゝえ、五十銭でも、たゞの五銭でも私のうちで失せ物があつたら隅から隅まで尋ねんなりまへん。」

三田は寧ろ迷惑に思つて、いきなり手近の新聞を擴げて讀み初めた。

「よろしうおあがり。」

お膳をさげて行く迄、婆さんは繰返して、必ず探索して見せると誓つた。

## 八の四

婆さんは、此の事件を弟夫婦には知らせともなかつた。人手をふやす事を嫌つて、おれんの來たのを喜ばない弟は、酒屋のかみさんの話を聞いて、手癖の悪いといふのをいゝ口實にして、ともすると婆さんの所置を非難しやうとした。若しも顛末を知つたなら、それ見た事かと云ふに違ひ無い。婆さんは第一にそれをおそれた。

右の手にお膳を持ち、左の手に飯櫃を抱へて、何となく足音も忍び度い氣持で二階から下りて行くと、目の下の玄關の日向で、當のおれんと藪覗の女の子が聲を合せてうたつて居た。

牡丹に唐獅子竹に虎

虎追うてはしる和藤内

わとろないかたに智恵かそか

ちゑの中山せいがん寺

せいがん寺の和尚さん坊さんで

坊さん蝸喰てへどついた

悪い根性なんか微塵もない子供々々した聲でうたつてゐるのが、かへつて面憎かつた。婆さんは怖い眼で睨みながら通り過ぎた。

臺所では、亭主がお膳の後始末をしてゐるばかりで、女房もお梅も見えなかつた。

婆さんは帳場の長火鉢の前に坐つて一服くゆらしたが、何としても黙つては居られなかつた。

「おれん——おれん。」

あたりを憚りながら呼んで見たが、

ちゑの中山せいがん寺

せいがん寺の和尚さん坊さんで

坊さん蝸喰てへどついた

と又しても元にもどつて繰返してゐて、聞えないのか、返事をしない。

「おれん。」

闕の側道行つて、うたいやめて振向いたところで、一寸といふ格好をして手で招いた。

「何だッ。」

直に立上つて来る後から、女の子もついて来た。

「お前はあちらへ行つて遊んどいで。」

「何で。あておれんちやんと一緒に遊んだるねん。」

女の子は鼻聲で不平がましく訴へた。

「おれんちやんには一寸用事がある。あちらへ行け云うたらいいんだらえ。」

「いゝ。」

下頤をつき出して反抗の氣勢を示しながら、やうやく玄關に引かへして行つた。

「何や。ひんがらめ。」

二つ三つ足踏みして脅かしたがきゝ目はなかつた。

「いゝゝ。」

上り口で下駄をはきながら、もう一度みそつ齒をむき出して、ばたばた往來に驅け出した。忌々しがつて凝然と見送つて舌うちした婆さんは、腰をおろすと直ぐさまひそめた聲に底力をこめて、

「おれん、お前悪い癖出したんと違ふか。」

鈎なりに右の人差指をまげたのを袖口からのぞかせ、臺所の方に氣を配りながら、おしつけるやうに訊いた。

吃驚して婆さんの顔を見上げるおれんを、婆さんの方も鋭く見下した。

「かくさんかてよろしい。私は何でも知つてるのやで。誰にも云へへんよつて、さ、

此處に出してみなはれ。」

大きな手の平をひろげて、盗つた金錢を出せと云ふのだつた。

## 八の五

蒼白い顔に緊張した表情を見せたおれんは、きれのいゝ目をみはつて、一瞬間思ひ迷つたが、直ぐに平靜な様子にかへつた。

「お婆ちゃん、何だんの。」

白ばつくて、差出したその手は何だと詰る調子だつた。よく通る聲が高いので、婆さんの方がびくびくして、

「そない大きい聲するのやない。皆に知れたらようないで。」

臺所に居る弟を氣にして振かへつた。

「お前なの、今朝三田さんのお室に行つたやろ。」

無兵急に口を切つたが、相手はちつとも動じないので、おもひ直して柔かに云つた。  
「へえ、權除に行きましてん。」

「その時になあ、三田さんの机の抽斗開けて見はせなんだか。」

自分も一度はおけて見た覚えがあるので、流石に婆さんも氣がとがめた。

「いんえ。」

軽く頭を振つたばかりで、決心を示す唇は一層固く閉ぢられた。

「かくしたら爲めにならんせ。三田さんの机の抽斗の財布の中のお金銭が無うなつたんや。」

「あて知りまへん。」

「知らん事があるものか。お前の手癖の悪い事は、おそのさんからも聞いてる。」

「そない云うても知らん事は知らん。」

何と云つても駄目だぞと、心を決めたやうな返事のしかたが、婆さんをむかつか

せた。

「何。知らん事は知らんだと。よろし。よう云うた。」

前後に氣を配る事も忘れて、隙ですり出しておれんの手首を固くつかんだ。

「私がかうと睨んだ以上は、白状せんかて白状させたる。」

ぐいと引寄せて、いきなり懐に手をつつこんだ。

「おれえ。」

ひとたまりもなく前のめりに倒れかゝつて、手足を一度にもがきながら、必死になつて懐に突込まれた手に喰ひついた。

「畜生ッ。」

おもひもかけない抵抗に、婆さんも夢中になつて手を引いたが、逃さうとする相手をみると、いきなり襟首をつかんで引戻して、横面をひつばたいた。はげしい物音に驚いて、臺所からは亭主が馳けつけ、奥の室からは女房も出て来て、雙方とも間に

入つて引分けた。

「何すんのや。荒ばい事して怪我させたらどないする。」

「お婆ちやん、まあ何事ですの。」

亭主は大きな體で婆さんの前に立ちふさがり、女房はおれんを片隅に連れて行つてかばつた。平手のあとが赤く残つて居る頬べたを濡らして、おれんの目からは大粒の涙が溢れて來た。

両手で前かけを顔に押當てるどひとたまりも無くすゝりあげ始めた。

「おれんが何ぞ悪い事したのかしらんが、えゝ年して亂暴する人があるもんか。お客さんの手前もあるやないか。」

いきり立つて、やいやい云つてゐる婆さんの肩を押へて、いきさつを知らない亭主はしきりになだめた。

「畜生め、こない喰らひつきよつた。」

前歯の痕の半月形についた手首を忍々しさうに見せながら、幅の廣い舌を出してなめた。

### 八の六

「一體全體おれんが何したのや。」

亭主も其處に腰を下して、婆さんをとがめる調子で訊いた。

「何も彼もあらへん。盗みしよつた。」

ほんどなら弟には知らせ度ない話だつたが、かうなつてはかくしても居られないので、唾を飛ばしながら罵つた。

「ふうむ。やりよつたか。」

待構へてゐた事のやうに、亭主は太鼓腹の底から聲を出した。

「離室の變人さんの財布からちよろりと一枚抜きよつた。」

「ふうむ。三田さんのか。なんば程。仰山か。」

「いゝえ、五十錢一枚には違ひないが、金高の多い少いにはかゝはらんわ。その根性をため直してやらんならん。」

「五十錢か。」

金額の少ないのが亭主の張つめた氣をゆるませた。

「そやさかいに、私は最初から手癖の悪い娘やつたらあかんよつて、止めにして欲しい云うたやないか。それを貴女が……」

「えゝい、そないな事云うてる時やないわ。」

重たい口でくどくど云ふ弟を叱りつけて婆さんは無理にも弱味をかくさうと思た。

片方ではおれんが、泣いてゐるのか、泣き止んだのか、わからなかつたが、顔に前かけを押當てた姿勢を崩さず、壁にへばりついて動かなかつた。何時來たのか、玄關にはお梅も佇んでゐて、往來で遊んでゐた女の子も、その袖につかまりながら一座の

景色を珍しさうに覗いてゐた。

「お婆ちやん叩いて泣かしたんやろ。」

蕨腕の目を雙方に働かせながら、遊び友達のおれんに同情して、婆さんには白い目を見せた。

「阿呆、引込んでえ。」

婆さんは大人氣無く、又むかつ腹を立て、烟管をつかんで立上つた。

「怖いよう。」

お梅の腰にしがみついで、女の子はひとたまりも無く泣き出した。

「えゝ、しやうむない人達やなあ。」

亭主は舌うちしながら圓でかい體を起して、

「さ、お前達はあつちやへ行つとれ。おれんには後にきく事があるが、そないな所に何時迄も泣いとつたら見とむなうてしやうがない。」

大きな手を擴げて、追ひ立てるやうにしながら、女房に目くばせした。さちがひじみた婆さんにかゝり合つて居ては限りが無い、兎に角一度は座をはづせと云ふ意味を、女房も直に受取つた。

「何時迄も泣いどるのやない。こつちへ來なさい。」

顔にあてゝある手を取つて引立てると、おれんは又すゝり上げながら、そのまゝ連れられて奥に引込んでしまつた。女の子も泣きじやくりながら、お梅のお尻にしがみついたまゝ、その後には續いた。

「ほんまにお金が失せたのかどうか、一寸三田さんに尋ねて來んならん。」

自分もいゝ加減に逃出さうと、ひとり言をつぶやきながら亭主も鬨を越えて出た。

「阿呆め、盗んだ奴をほつたらかして盗まれた者に尋ねて何になる。」  
見送り果てゝ、婆さんは嚙んで吐出すやうな調子で罵つた。

## 八の七

「えゝ、御勉強中を御邪魔致します。」

襖をあけて入つて行くと、何時もの通り三田は机に嚙りついて思案に耽つてゐた。

思ふやうに原稿が抄取らないで、一字一句に難澁してゐる處だつた。見るからうなさうな顔付で、振向いてから洋筆を置いた。

「只今一寸伺ひましたが何か間違ひが御座りましたさうで、まことに申譯のない次第で御座いますして。」

それが癖で、おそろしく叮嚀な口をきゝ、揉手をしたり、頭を掻いたり、膝頭を撫でたりしながら、うんともすんとも云はない三田に對して、亭主はしきりに詫びるのだつた。苦り切つてゐる相手は盜難の爲めに怒つて居るのだと思つた。

「あのちつさい女が居りまつしやろ。あれは悪い癖がありますさうで、萬一お客様の

物にでも手をかけるやうな事があつたら申譯ないと思ひまして、私はそんなもんはうちには置けんと申しましたので御座りますが、何分人手が足りませんのと、酒屋の方の親戚に當りますので、つい心を許したといふわけにもおまへんのやけれど……」

だらだら長く喋つてゐられるのが、三田にはひどく堪へ難かつた。

「さうするとあのおれんていふちいさい娘が取つたどわかかつたんですか。」

矢張り想像通りだつたのかと思つた。彼はがまんしきれなくなつて、手早く解決をつけたかつた。

「へえ、まああれやらうと思ひますので。婆さんもそない申しますし、外には氣心の知れた者ばかりで御座りますので。」

「そりやあ亂暴じやありませんか。取つたか取らないかはつきりわかりもしないのに、犯人だときめてしまふなんて。」

意地の悪い婆さんや、ねち／＼虐めさうな亭主に責め問はれては可哀さうだと思ふ

ど、たしかにおれんに違ひないと思へはするけれど、寧ろかばつてやり度かつた。

「左様では御座りますが外にはその様な大それた事をする者は一人も居りませんし、元々手癖の悪いといふ事は知れて居りましたので、只今階下で婆さんが糺問して居りましたところで……」

「益々いけないなあ。ちいさな者を糺問するなんていふのはよくありませんね。第一机の抽斗に墓口を入れて置くのは、置く方が悪いんです。別段大金を盗まれたわけでもなし、今後は私も氣を付けるから、まあ此の儘事を荒立てないで呉れませんか。」

すつかり怒つてゐる事と信じてゐた三田の意外な言葉に、亭主は多少面喰つた形だつた。

「さう仰しやられますと却つて恐縮致します。たとへ一錢でも五厘でも、お客様の物に間違があつたとなりましては、手前どもの家の名にかゝはりますので、どうにも一度は責めて見ん事には申開きが立ちません。何といふても未だほん子供の事で御座い



ますから、脅すかすか致しましたら直きに白状する事とは存じますが、一應御挨拶申して置かん事には氣が濟んまへんので……」

又長々と喋りさうなのを、三田は再び遮つた。

「斷じてそれはよして下さい。脅したりすかしたりして白状させるのなんか氣持が悪い。私自身の重大な不注意なだから今度は此のまゝにして、今後はお互に氣をつける事にして貰ひませう。」

大女の婆さんと、大男の亭主に折檻されて、白い手足を苦しみがく小娘の姿がいたゞしく想像された。そのあげく犯人の帯の間からでも、たつた一枚の五十錢札が出て來られては、愈々不愉快だと考へた。

「もう此の話はうち切にませう。つまらない事にかゝりあつてゐると、頭のまごまりが悪くなつて爲方がない。」

彼は苦笑にまぎらして、早くも半身机の方に向きをかへた。

「恐れ入りました。失禮ながらお若いには似合はん御ふんべつで。では折を見て意見をしてやる事に致しまして、御言葉通り今度は此のまゝ許してやる事に致しませう。」亭主はさう云つて心底から安心して席を立つた。その實おれんをつかまへて、どうしても白状させてやらうと思つてゐたが、頭ごなしに叱られるかと思つた三田の前を無事に引下る事の出来る機會を逃すまいとすつかり感服した様子を見せたのだつた。

## 八の八

帳場では婆さんが佛頂面をしてやけに煙草を吹かしてゐた。自分から見れば、遙に智慧の足りない弟が、さも一家の主人らしく、事を捌く態度で二階に上つて行つたのが氣に喰はなかつた。挨拶もろくに出來もしない癖に、のこのこ出て行つて、下手な事を喋るに違ひ無い。あゝいふ鈍な男は、矢張り臺所で、茶碗を洗つて居ればいゝのだと、事件の中心人物が自分でなくなつた不平もまじつて、顔を見ても口をきく氣に

はならなかつた。

弟の方では、氣心の知れない三田の言葉ではあつたが、兎に角覺悟をして行つた豫想に反して、一言も怒られもせず話を濟ませて來た得意が十分だつた。口先ばかり達者でも、婆さんなんかには、斯う圓滿に事を選ぶ力量は無いのだと、すくなからず鼻が高かつた。

亭主の重たい體が、づしんづしん底響をさせて梯子段を下りて來たので、女房もお梅も女の子も事の成行を心配して又ぞろ／＼出て來た。

「三田さんごない云ふてはつた。」

流石に女房は亭主の安否を氣づかふやうな熱心な様子で訊いた。

「何もやかましい事云ふてあれへん。理窟はよう解つてはるさかい、天下の通用を机の抽斗に放り込んだいた自分の方に罪がある。盗んだ者があつても止むを得ん、うつたり□いたりする必要は無いと、こない云ふてはるのや。」

さうおどなく云はせたのは自分の腕なのだぞといふ腹で、女房に聞かせるふりをしながら、實は婆さんの耳に入れ度かつたのだ。

「へえ、よう理窟の通つたお人やなあ。」

女房は心底から感心したが、傍で聞く婆さんは一々片腹痛い事だらけだつた。さも得意さうに話してゐる弟も弟の相槌を打つ女房も馬鹿にしてやり度かつたが、それよりも肝腎の三田の態度が一層齒がゆかつた。金錢を盗まれたと云ふから、目星をつけて探索してやらうと云ふのに、生温い事を口にしてゐるのは、ぐうたらとも意氣地なしとも罵つてやり度い程だ。え、構ふもんか、もつと盗まれると思ひながら、婆さんはなほしきりに烟を吹いて、たゞ一人そつぼうを向いてゐた。

あけ放した襖の向うの奥の室に一人残されたおれんは、鋭い耳を聳立て、みんなの話を一言も洩らさず聞きながら、先刻疊に突伏したまゝの姿で、涙の乾いた顔をそつと持上げた。度々その爲めにはしくじつたので、随分自分でも悪心をたしなめて居

たのだつたが、ふらふらと癖が出て、三田の抽斗の墓口から抜いたたつた一枚の札を帯の間にかくした。後では矢張り心がどがめて出来るものならこつそりと、元に返してしまひたかつたが、そのひまも無く婆さんに襟首をつかまれてしまつたので、如何ともする事が出来なくなつた。かうなつてはかくし通す外は無いと決心した。おれんはそつと帯の間に手を入れて、皺くちやの札を引出したが、直ぐに腰あげの中にまるめて突込んだ。それで大變氣が樂になつたが、矢張り疊に平べつたく嚙りついて動かなかつた。

## 八の九

亭主は、婆さんの手荒な折檻は見ても居られなかつたし、そんな事にも暴威を振はせるのを嫌つたが、元々自分の不承知にも拘らず連れて来たおれんには同情が無かつたから、たしかに盗んだに違ひ無いものを、のめく見逃しては置けないと思つた。

何氣なく座を立つて來て見ると、おれんはちいさな體をうつ向に疊の上に向づくとつてゐて、めりんすの紅い帯の色ばかりいき／＼として、本人はみじめな態に見えた。「おれん、ごないした。」

少し心配になつて、肩に手をかけて引起してみると、ひつ／＼めに結つた髪の毛の垂れ下つたのが、涙で濡れて頬邊にへばりついた顔をあげて、膝頭のはみ出した着物の前を搔合せながら坐り直した。

「叩かれて何處を痛みはしないか。」

先づ柔かくいたはつて置いて、それから段々問ひたゞしてやらうと思つた。おれんは横に首を振つた。長い間同じ姿勢で、たつた一人倒れてゐた退屈を免れた安逸が、乾いた涙でびか／＼光つてゐる顔に、自ら現れてゐた。

「婆さん、無茶しよつたな。」

お前に同情してゐるのだと知らせる積りで云ふと、おれんはそれを受け入れてそつ

と笑つた。

「お前ほんまに盗まへんなんだんか。」

そろ／＼本筋に入つてもよからうと思つた。

「一寸した迷ひで悪い氣が起きたのやつたら、今のうちに私にうちあけた方がえゝで。誰にも告げずに無事に済ましてやる。お前の親達にも、おそのさんにも何も知らせはせえへん。私一人で聞いて、此の腹の中にしまつとくわ。」

だぶだぶの太鼓腹を叩いて笑つて見せたが、相手は目元で微笑をかへすばかりで、堅く結んだ唇を開かうともしなかつた。

「ほんまの事を清く云うたがよい。下手にかくしたりすると、警察の手を借りても調べて貰はんならん。」

脅かした方がきゝ目があるかなと思ひながら、怖い顔付をして見たが、矢張り目元で微笑してゐるばかりで、手ごたへが無い。その人を馬鹿にしたやうな微笑が亭主を

短氣にした。

「おい、何とか返事をせんか。」

聲を太くして擦り寄ると、細い手首をぐつと握つた。婆さんがやつたと同じく、彼もおれんの懐に、むくむく肥つた手を突込んだ。心持身を固くして防禦の形を見せたばかりで、おれんは冷然として動かなかつた。今度は帯の間を探つて見たが、汚ならしい鼻紙が出て來たばかりだつた。兩方の袂にも、袂囊の外には何も無かつた。

「こら、何處にかくした。白状せんとえらい目にあはずぞ。」

愈々力を込めて手首を握りしめた。おれんは痛さを堪へて體を斜に振りながら、

「あて、何も知らん。」

と意外に強く云ひ切つた。

「何ッ。何も知らんだぞ。」

亭主は相手の太々しい様子にかつとして、思はず聲が高くなつた。

「貴方何してはる。ひどい事したらあきまへんで。」  
 次の間から驅込んで來た女房に、言葉せはしくたしなめられて、やうやく吾にかへつて握りしめた手を放した。おれんは手首をさすりながら、涙をいつばいためた目で、怨めじさうに睨んでゐた。

## 九の一

三月の中旬には、三田の小説「世相」も新聞に掲載され始めた。すつかり出來上つたわけでは無かつたが、其の前に出てゐた流行作家の原稿が中絶してしまつたので、狼狽してしまつた新聞社の懇請に否み難くなつて、幾日分かの原稿を送つたのだ。

その小説は二人の主人公を持つてゐた。一人は一生を事業の爲めに捧げて、幾多の艱難を切抜けた老實業家で、齡既に古稀に達し、そろそろ仕事を後進に譲つて退隠しやうと考へてゐる矢先に、絶大の金力を持つ赤の他人に、彼の一生の記念であつた

會社を乗取られる。もう一人は其會社の給仕から仕上げで、漸く一人前になつた若い社員で、實直に且機敏に働いてゐたのが、新しく入つて來たタイピストに戀して、段々仕事もおろそかになり、身も持ち崩したあげくに悪い事をして免職される。此の二つの出來事を綯ひませにしたのが大體の筋だが、それよりも其の背景になる現代の世相に作者は多くの力を盡した。三田はかなりの自信を持つて、日々の夕刊に出る自作を待つてゐた。

何事に限らず、正當の理解は無く、只管話の種の殖る事を喜ぶ會社の同僚は、いちはやく噂やかげ口の材料にした。

「三田君もかうして算盤を持たせると吾々同様不器用だが、その道では樟先生で通るんだからね。」

机を並べてゐる係長が先づ口をきると、

「一體近頃は原稿料はいくら位呉れるもんです。」

すぐに商賈人根性を出すのが出て来る。

「私なんか駄目なんです。ほんのおしるししか貰へません。」

「おしるしだつて結構ぢやありませんか。なぐさみに書いたものが金になるんだから。」

「ほんまにいゝ道楽だね。」

口々に云ふ言葉に悪気は無くても、餘りに無理解なのが腹立たしく、三田は返事もせず、座をはずす事が多かつた。

下宿でも同宿の貯蓄銀行員が眞先に氣がついて、給仕に出てゐたお梅に話した。

「離室の先生の小説が新聞に出てゐるせ。」

「へえ、三田さんのだつたか。よう出来てまつたか。」

「いゝか悪いかわからないが、矢張り幽芳や浪六にはかなはないね。何となく野暮つたらしくていけない。」

「へえ、左様だつたか。」

幽芳が誰だか、浪六が何だかお梅にはわからなかつた。野暮つたらしからうが、無からうが、兎に角毎日顔を見てゐて、不思議な人間だと思つてゐる三田の書いたものが、平生偉いものだとも怖いものだとも思ふ新聞に出たと云ふ事が大きな出来事だつた。

「あのなあ、三田さんの書かはつた小説が夕刊に出たるさうや。」

お膳を下げて階下に下りると、皆に聞えるやうに云つた。

「へえ、左様か。どんな事書いてはるのやろ。誰を讀んでしまつた人に借りてんか。」  
婆さんが第一に乗氣になる、弟夫婦も共々に、好奇心を動かした。

「何やら野暮くさい氣がすると、六疊のお客さん云うてはつた。」

「ふうむ、さうやろ。野暮なお人が書かはるのやよつて、野暮臭いのは當前や。」  
すつかりその小説の値うちはわかつてしまつた氣がしたが、それでも矢張り手に取

つて読んで見たかつた。

## 九の二

最初の五六回は、一生かゝつて完成した仕事に満足し切つて居た老實業家が、商業道徳を無視した金力の暴威に始めて失意の歎きに陥り、今日迄得意の念を以て顧みた過去が、殆ど全く後悔の堆積としか考へられなくなつた心的苦惱が、随分しつこく克明に書いてあつた。

「何やら難かしい事ばかり書いてあるな。これでも小説と云へるのやろか。」

昔讀んだ小さん金五郎など、引比べて、婆さんは其のつまらなさにあきれたが、それでも家中の者を集めて、妙な節をつけて讀んで聞かせた。誰の頭にも變な人として映つてゐる三田の書いたものだ云ふ事が、特別の好奇心を起させるので、お梅やおれんはまだしも、藪尻の女の子迄、おとなしく膝に手を置いて朗讀を聽いてゐた。

「矢張り學問のある人の書くもんは違ふわ。」

別段面白いとは思はなかつたけれど、あんまり皆がわからない顔をしてゐるので、亭主は一人わかつた様子をしてつぶやいた。

「そやけれど、ひとつもおもしろい事ないな。」

婆さんは讀み終つて新聞を疊んだが、何も頭に残つては居なかつた。

それでも自分のうちの止宿人が、偉い新聞に續物を書いて居ると云ふ事は、随分大きな誇だつた。近所の床屋、煙草屋、駄菓子屋の店頭に立ちどまつて、時候の挨拶が済むと直に、其の自慢をした。

向側の湯屋に行つても、番臺に坐つて居る女房に話し、次の日には娘に話し、その外顔を合せる近所のかみさん達にも話した。

「小説書かはる人どんな人やろ。」

何時も銀杏返で、襟つきの着物を着て、眞白に白粉を塗つて番臺で講談本を讀んで

ある娘は、直ぐに好奇の目をみはつた。

「毎朝起きぬけに来るお人や。大きいからだの、眉のこんな眼の玉のこんな……」

婆さんは太く釣上つた眉毛を兩方の人差指で描き、大きな眼を二つの輪にした指で示した。

「あゝ、あのお髯のあとの青いお人か。」

「そやそや、怖い顔しただんまりさんや。」

その怖い顔しただんまりさんが、小説を書く時は幾時間でも机にむかつたきり動かず、お茶も飲まず煙草も吸はず、物を食べる事さへ忘れて、夜も遅く迄勉強してゐるのだと、平生は面白くない人間だと思つてゐるのだが、話の種にする時は、何から何迄自慢にして、聴手に感動を強ひた。

そんな事とは露知らない三田は、朝は何時もの通り起きると直ぐに湯に行くのだつた。湯錢をうけとつた娘は、何か用事ありさうに狼狽しく番臺を下りて、奥に駈込ん

だが、間もなく母親を引張つて來た。恰も三田は着物を脱いで素裸になつたところだつたが、親娘の視線は容赦なく全身にそゞがれ、母親の方は袂から取出した眼鏡をかけて見るのだつた。ふと氣が付くと、その手には彼の小説の出てる新聞を持つてゐた。三田は毛もくじやらの手足を氣にしながら、逃げるやうに浴室に入った。

### 九の三

一巡知つた顔に觸れ廻つた後にもなほ長々と續く小説「世相」の主人公の老實業家の述懐に、婆さんを始めとして、下宿の者はあきてしまつて、近頃は家中が寄集つて朗讀を聴く事もなくなつた。ところが或日酒屋のお女房さんが來て、

「あんたどこの三田さんの小説、えらい面白うなつて來たなあ。」

と話のついでに云ひ出した。

「ふうむ、私とここでは此の二三日讀んでへん。なんとか云ふおやつさんの泣言にもあ



いてしまつた。」

婆さんは一見識見せた積りで答へた。

「そのおやつさんの話もう済んでしまつた。一昨日からは若いお勤人が、同じ会社に勤めてはる女子はんに惚れて大騒ぎしてるのや。」

さも實際の出来事のやうに話して聞かせた。男と女の間の話だと聞くと、婆さんも又乗氣になつて、早速二階から借て来て其場で讀んだ。新しく來たタイピストに目をつける多くの若い社員の中の一人が、美文めかした文體の艶書を送るところが婆さんの氣に入つた。

「へえ、三田さんみたいの人に、ようこんな事が書けたもんやなあ。」

殊の外感心して、繰返して皆に讀んで聞かせた。

小説の筋が多少いろつぼくなること、敢て下宿の婆さんばかりで無く、一般の讀者にもうけがよくなつたらしい。作者へ宛て、感想を寄せる愛讀者も二三には止まらな

つた。中には艶かしい女の手紙もまじつてゐた。桃色の封筒に紫インキで糸蚯蚓のやうな字の書いてあるのが、机の上に乗つてゐるのを見た時は、今迄にも一度や二度はあつた経験から、誰も見てはゐないのだが、上氣するやうな心持で、あたりを憚かりながら開いた。

先生「先生と呼ぶ事を御許し下さいませ。定めし先生は此の御手紙をお開き遊ばして、處女にあるまじき不謹慎者とおさげすみになり、お怒りになる事と存じますが何卒そのやうな酷な目を以て御覽下さいませんで、あはれな少女よと御思ひ遊ばして下さいませ。」

あゝ不思議！不思議！不思議と申しませうか運命と申しませうか、若し此の世に神と云ふものがあるのなら、神のたはむれで御座いませうか、ひとたび先生の御高作「世相」を拜見致しまして、私は全くチャアムされてしまひました。血潮は胸に高鳴り、涙は止度なく流れ、かよわき少女の身も魂も震へました。あゝ此の胸の苦しき、

心臓の悩み……………

先生！名も無き一少女が、此のやうな事を申し上げましたらお怒り遊ばしまして？でも私を泣かせ、苦しませ、血を吐くおもひをおさせ遊ばしたのは、先生のお美しき御文章の罪で御座いますわ。私がかげながらお慕ひ申して居る位はお許し遊ばしてもよろしいでせう。

まあ飛んだ失禮な事を申しまして、私如何致しませう。御免下さい。

まだ一度も御目もじは致しませんが、私實は先生には夢で度々御目もじ申上げて居りますの。御看病もさせて頂きました。誰にも秘めて語らぬ過去のお話も聞いて頂きました。温かい温かい御同情の御涙さへ頂戴致しました。最後にはお兄様とお呼びする事も許して下さいました。あゝこれが夢で無く、ほんとの事で御座いましたら、私ごんなにごんなにお嬉しう御座いませう。先生！どうぞ一度の御目もじ御許し遊ばして下さいませ。一生の願で御座いますから。

未だうら若き處女が、耻を忍び、良心とたゝかひ、泣いて泣いて病の床でしたゝめました此の文を、無惨にも御嘲笑遊ばしたり、御焼捨て遊ばすやうな事がありましたら、私はどうなる身なので御座いませう。生きては居られまいと存じます。勝手かもしれませんが、一滴の御涙に浴し度いので御座います。断じて御取上げ賜らぬとならば、朝夕に身も細り行く苦しい思ひに免じどうぞ先生の御寫眞一葉と、成るだけ御尊體に近くおつけ遊ばすもの——おはんけちなりと御恵み下さいませ。その賜物に對し、私は女の最も清く尊き犠牲を捧げる事を喜んで致します。あゝ、今宵は殊に熱も高まり、堪へられぬおもひに枕を濡らして居ります。

#### 九の四

所番地も明かに書いて、松宮花代といふ名前も本名らしかった。追而書には、父母や兄の目を忍んで書いたのだから、返事を呉れる時には是非共女の名にして出して呉

れと注意してあつた。

讀終つて、三田は一層動悸が高くなつた。餘りに紋切形ではあつたが、若い女のどうにもなる肉體が目の前に横はつてゐるのに等しいのだから、勝手極まる想像の止まる處を知らない程次から次と湧いて來るのも當然だつた。處女だ、處女だとさも自慢さうにいふ所から押ししても、處女らしくはなかつたし、おもひに惱んで病床に在るなど、見え透いた事を書いたり、最も清く尊きものを捧げるとあからさまに餌を見せびらかす態度などは面憎かつたが、矢張り破いて捨てる氣にはならなかつた。二度三度繰返して讀んだ後で、机の曳出の一番の奥底にしまつた。

二日三日、天王寺に住むといふ女の事は、絶間なく三田の空想に浮かんで、多少の不安をまじへながら、十分彼を楽しませた。必ず返事を呉れとあつたけれど、どうでも好きなやうにして呉れと體を投出して來た相手に易々と乗せられては、いゝなぶりものになるばかりだ、不良少女なんかにかゝはつてたまるものかと思つて、そのまゝ

うつちやつて置いたが、それつきり交渉が無くなつては惜いやうな氣も勿論あつた。もう一度位は手紙を寄越すだらうと、猾い事も考へてゐた。

或日曜の朝であつた。前の晩に遅く迄原稿を書いてゐたので、すつかり疲れて寢坊した。何時の間にか、誰かど雨戸をあけたので、頭の上の障子には、春めいて來た日の光りが暖く漂つてゐた。目は醒めたが、床の中でぼんやりして、起きようか、もつと寢てゐようかと迷つてゐるところに、狼狽しくお梅がやつて來て、來客だと告げた。

「女の人かい。」

咄嗟に三田は手紙を寄越した女に違ひ無いと思つた。

「いゝえ、未だほん若い書生さんです。」

「ふうむ。」

なあんだ面白くもないと思ひながらも、急いで夜着をはねのけた。階下の汚ならしい洗面場で顔を洗ふ間も、どんな人間が尋ねて來たのか考へても見當はつかなかつた。

濡手拭をふらさげて室に歸ると、お梅が床をあげたあとに堅くなつて坐つてゐる十七八の少年があつた。

「先生ですか。」

敷いてゐた蒲團から滑り下りて叮嚀に頭を下げたが、想像して來た人間とは違つたぞといひ度いやうな表情がありありと見えた。

「私は三田です。」

先生と呼ばかけられた丈で、三田にはこの少年が何の爲めに自分を訪問したか、彼が如何なる種類の人間であるかと直感された。こいつは迷惑な奴に襲はれたぞと思ふと、數分間前、手紙の女かと思つて胸をとどろかした事が愈々馬鹿々々しくなつて、彼は不機嫌な態度で相手を見守つた。五分刈の額の白い愛くるしい顔だから、紺がすりの着物に紺がすりの羽織で、姉か妹が編んだらしい海老茶の毛糸の羽織の紐がまるつきり子供らしかつた。

## 九の五

「先生、私を弟子にして呉れませんか。」

暫時無言で對座して居たが、少年は稍恥らひながら、色の白い耳朶迄赤くして口を切つた。彼の話によると、今中學の五年になつたばかりで、來年は卒業の筈だが、學校で教へる事にはちつとも興味が無く、あと一年の辛棒が到底も出來ない。父親は死んでしまつたけれど、父が生前残した事業があつて、中學を卒業すれば、自然其處で働かなければならない。姉妹はあるけれど男の兒は一人の事だから、母親は大概の事は云ひなりになつてゐるが、息子が小説家になる事丈は怒つたり泣いたりして反對する。それにもかゝらず此の少年は嫌ひな學校をやめて、直にも小説家になり度いのだつた。たまたま三田の小説の新聞に出たのを読み、前々から雑誌でも名を知つてゐたし、大阪には外に知名の作家も少いので、新聞社で下宿を訊ねてやつて來たのだ。

「小説家になるのに學校なんぞ役に立ちませんな。」

話をしてゐるうちに羞しがりもうすらいで、彼は同情を求めたのだつた。

聽いて居る三田の目の前には、その年頃の自分自身の姿が浮んで來た。學課は怠け放題で、小説本ばかり耽讀してゐたのだから、苦も無く目前の少年の心持になり切る事が出來た。しかし長い間の歲月は、彼を臆病な大人にしてしまつたので、此の場合相手の一本調子に、うつかり相槌は打てなかつた。三田は早くも自分の立場を警戒し始めた。

「矢張り學校はしつかりやつた方がよござんすよ。學問の根柢があると無いとでは、作家として立つ上にも非常な相違がありますからね。」

直接小説を書くのに特に必要な智識は興へないにしても、此の人生を見る上に、深味を増すに違ひ無いと、學問の功德を説いた。

少年は不満さうな顔をして聽いて居たが、

「それぢやあ學校はつゞけてもいい、んですか、私見たいなもんでも小説家になれますかしら。」

と話題を變へて來た。

「そりやあ勉強次第でせう。素質による事は勿論だが。」

「では先生の弟子にして書方を教へて呉れませんか。」

「教へるなんてものぢやありませんよ。自分で勉強する外はありますまい。それに貴方のお母さんは小説志願に反對なんでせう。」

「反對したつて構はん。うちのお母さんは頭が古くてかなひませんわ。」

少年は平生崇拜してゐる作家の名を擧げて感激の心をもらし、好きな作品に對する批評めいた事も云ひ、藝術家らしい生活に憧憬して、商人の家に生れた不平を述べた。その言葉の端々には、屢々文學青年の間にもみる如く、藝術家の生活とは、必然酒と女に關係のあるものとして、それをばなばなく空想してゐる傾向が見えた。

三田は又しても大人の臆病心に襲はれて、その考への間違つてゐる事を、訓戒めいた口調で説いた。それは、若し少年が推測するやうに、酒と女にばかりかゝりあつて居たら、時間と精力を消耗してしまつて、創作なんか出来なくなる。第一流の作家の生活は、極めて眞面目なものだと云ふ意味の事だつた。

話は兎角途絶え勝だつたが、かなり長い間話込んで、歸り際には何だかもじくしてゐたが、思ひ決したやうな調子で、

「先生、下手なんですけれど私の書いた小説を見て下さいませんか。」

と云ひながら、懐から原稿を取出した。さうして次の日曜には又來るからと云つてやうやく歸つた。

## 九の六

少年が置いて行つた小説は二つあつた。極端に幼稚な字で書いた、假名づかひも文

法も滅茶々々の文章でひどく讀みにくいものではあつたが、題材はほん／＼に似合はず、苦勞人の見た世の中らしく、かなり深刻に觀察して、一種重苦しい氣分を起させるものであつた。色の白い、どつちかといへば女性的の顔立の少年が書いた物とは思はれなかつた。しかし二つの小説の二つながら、性慾の壓迫に悩んでゐる男や女の事が描いてあるのが、矢張り生若い書生らしさを現して居た。年上の船長の妻に可愛がられる少年の事を描いたのは、自傳らしくも思はれた。三田は存外感心して讀み終つた。

二三日たつと、その少年は又やつて來た。

「こんどの日曜に來やうと思つたのですけれど、昨晚ひとつ小説が出来ましたので持つて來ました。」

直ぐに懐ろから二三十枚の短篇を出して坐り込んだ。三田は「世相」を是共四五日中に切上げてしまひ度いと思つてゐたので、度々訪問されては迷惑だつた。

「今晚は、私は是非とも勉強したいと思つてゐるのだが、其處いらを一緒に散歩してお別れにしませうか。」

長々と話し込まれては堪らないと考へて、自分の方から進んで戸外に出た。中之島の公園を歩きながら、前に讀んだ少年の二作について批評をし、いゝ所はいゝといひ悪い所は悪いと、明かに指摘した。

「兎に角面白い事は面白かつた。しかし文字や假名づかひにも、もう少し神経を働かした方がいゝでせう。第一讀みにくゝつて爲様が無い。」

細かい點迄注意したが、相手は自信のある態度でいつた。

「字なんか、ごないだつて構やせん。先生は割合に古いすな。」

「そりやあ古いさ。」

三田は外に答へる言葉を知らなかつた。

一廻り歩き廻つて、難波橋の際の珈琲店に入つた。其處で乾いた咽喉を濡らして別

れようと思つたのだ。硝子障子の外に水の見える卓につくと、

「今晩は。お久しうおまんな。」

お白粉を厚く塗り立てた給仕の女が、少年を見て挨拶した。

「あんた此頃はちつとも見えてはおまへんな。南にはかり行つてはるのやろ。」

遠慮なく口をきかれて、先生の手前困つたらしく眞赤になつてしまつたが、話をそらす爲めに、

「××は來ないか。」

などゝ友達の名前をいつて訊いた。

「今先刻迄見えてゝした。」

「○○は。」

「貴方の方がよう知つてはる筈やわ。」

何か樂屋落のありさうな話をして、女は手をあげて少年の脊中を叩いた。

三田は麥酒をあつらへたが、

「強い酒でなければ酔はんからつまらん。」

「と駄々子らしい事をいつて、彼はアブサンを命じた。さういふ風にするのが藝術家なんだといふやうな、文學青年らしい様子が見えた。三田は又しても責任を感じて、しきりによき藝術家の生活は、遊蕩には縁遠い事を繰返して聞かせた。」

## 九の七

土曜の晩に書終る豫定だった長編「世相」の最後の句讀點を打つたのは曉方近かつた。數箇月の間一生懸命をやつた仕事を終つたので、重い責任を果たした満足で熟睡した。三田は正午迄寝込んでしまつた。

はればつたい目には痛い程新鮮な窓の外の景色は、既に全く春になつて居た。手を延ばせば届くところ迄、枇杷の枝が来て、梢は若い葉が勢ひよく重なり合つてゐる。

その隣の柳の枝垂れた枝は、境の黒塀を越して御旅館雪本の庭に忍び入つてゐる。時折、花合の客の集まる外には連込の宿らしい其の家も、二階の縁側の欄干に、艶めかしい友染の夜具を干し、障子はすつかりあけつ放しで、惜氣も無く日の光が流れ込んでゐた。暫時その春の色をうつとりと眺めながら、仕事を終つた氣安さと、日曜の長閑さを痛感した。何處かに遊びに行かうかなとも考へたが、小説家志願の少年古林豊太郎が来る約束になつて居るのを思ひ出した。

湯屋に出かける時、梯子段で擦違つたお梅は、

「お風呂だつか。えらいお早うおまんな。」

と笑顔を傾けた。

「直ぐ歸つて来るけれど、お客が来る筈になつてるから、來たらあげて待たして置いてくれ玉へ。」

さう云つて彼は下駄を突かけて出た。散歩した晩に受取つた少年の第三の作は、



んな寛大な検閲官でも發賣を禁止しさうなものだつたが、出來榮は一段勝れて居た。異常なる慾情の好奇心が、彼の觀察を鋭くしたのではないかと思はれた。人生の危機にある少年に對して、三田は同情を持つて居た。

相も變らず素裸の全身に番臺の娘の視線を浴びせられて、三田は眞赤に茹つて歸つて來た。

「三田さん、お客さん來てはりまつせ。」

玄關で誰かの靴を磨いてゐたおれんが、仰ぎ見て云つた。

「えらい別嬪だんな。」

何も云はない三田の後から、重ねて聲をかけて、こまつちやくれは面白さうに笑つた。

「何を云つてやがるんだ、月並だぞ。」

古林少年が待つてゐるのだとばかり思つてゐる三田は、おれんがかつがうとするの

だと取つて、腹の中でさうつぶやいた。勢ひよく梯子段を駈上り、ごすんどすん廊下を踏んで室の襖をあけたが、思はず知らず後戻りしさうになつた。直ぐ目の前に紫矢緋の羽織を着た小柄な娘が坐つてゐたのだ。これこそ、女にとつて最も清く尊きものを、一枚の半けちに替へやうといふ少女に違ひ無いと思つた。

三田は濡手拭を欄干に掛け、思ひ決したやうな態度で机の前に位置を占めたが、女は素晴しく大きな廂髪に幅廣の淡紅色のリボンの目立つ頭をうつむけたまゝ、眞白に塗つた襟首を見せて動かない。長い間動かない。三田は自分の方から口をきききつかけも無いので、黙つてその廂髪を見下してゐたが、餘り強情に相手が動かないので腹が立つて來た。彼は、わざと手荒に机の上の新聞を取つて擴げて讀むやうなふりをした。そんな芝居がかりのだんまりの相手になんかならないぞと云ふ所を見せる積りだつた。

果して女は狼狽して、普通よりも半音階位高い細い聲で呼びかけた。

「先生、おわかりになつてゐらつしやるでせう。」

白粉の濃い顔をあげて、正面から大きな目に笑を含ませて凝然と見た。

## 九の八

額をかくすやうに突出した廂の下に、黒目の部分の多過る程黒い目をみはつて、その目元と口元に微笑を湛へてゐるのを、もてあました形で三田は見守つた。

「先生、お怒りになつてゐらつしやいますの。」

今度は首を傾けて、下から覗き込むやうにして訊いた。三田は勝負に負たやうな心持で目をそらした。

「貴方は御病氣じやあないんですか。」

「まあ、先生！おほゝゝゝ」

まづい事をいつたなと思ふひまもなく、相手はリリリリと響く聲で、體を二つに折つて、笑つて笑つて笑ひ止まなかつた。

「ほんとに先生は、私が想像して居た通りの方でゐらつしやいますわね。おほゝゝゝ」  
 すました顔をして物を言つて置いて、又堪性も無く笑ふのだつた。三田は苦い顔をして見てゐる外は爲すべき事を知らなかつた。おもひに悩み、病床に涙に濡れてゐると書いてあつたのとは反對に、陽氣な顔立ちの、小柄ながら健康さうなのが、聲にも態度にも現れてゐた。三田は怒る事も笑ふ事も出来ないで、如何處置をしていゝか、只管當惑するばかりだつた。

「先生、お驚きになつたでせう。」

何かいふ時には、屹度冒頭に先生と呼びかけたが、別段何も取りこめた話には及びさうも無く、たゞ珍しい人間を訪問するのが面白いといふ風に見えた。三田は種々に空想した手紙の主が、決して自分の腦裡に描いた紅葉時代の小説の女主人公では無い

のを知つて少からず物足りなかつた。

「お作は毎日愛讀して居りますわ。」

など、いいひもしたけれど、別段文學に深い興味を持つて居る様子にも見えなかつた。従つて最初のうちこそ、何かしら胸の騒ぐ氣持に惱まされた三田も、段々馴れるにつれて平氣になつた。彼は空腹と退屈を感じて來た。

女は、病氣の爲に去年の春女學校を中途でよして、今は好きな音樂——マンドリンの稽古をして遊んでゐる。父親は或會社の重役で、兄と自分を生んだ母は死んで、今のは繼母だといふやうな身の上話を、自分自身が面白さうに話してゐた。その話が途絶えては又續いてゐるところへ、おれんに案内されて古林少年が入つて來た。三田はその姿を見ると、救はれた氣持ではつとした。

「こちらは古林さんです。」

紹介すると、

「私は松宮花代と申します。どうぞよろしく。」

名告りながら、色白の少年の顔に、大きな黒目勝の眼をうつした。

「先生、こないだのはあきませんでしたか。」

その目に見据ゑられて眞赤になつた少年は、救を求める様子で、原稿の事を口にした。

「あれは發賣禁止ですね。よく描けてはゐるけれど、とても印刷にはならない。」

三田の言葉に一層赤くなつて、堅く膝を締めてもじ／＼してゐるのが、矢張り一人の女の存在の爲めのやうに見えた。

「まあ、この方も小説をお書きになるんですか。」

女は好奇心の爲めに愈々大きく開いた目を、少年の顔からそらさなかつた。

「え、なか／＼うまいんですよ。」

三田は自分よりも尙更意氣地の無い者を見出した安氣な氣持で、始めて冗談らしい

口がきけた。

「拜見致し度う御座いますわ。」

さういつて女は膝を乗出して來た。

九の九

机の曳出から三田の取出した原稿を受取つた女は、直ぐに膝の上において讀み始めた。「體驗」と題する其の小説は、人間——殊に藝術家を完成せしむるには體驗が豊富で無ければならないと信じ、且つ公然主張して居る眉目秀麗の青年の肉體の經驗を描いたもので、主人公の際どい冒険は、到底中學の生徒の作り出したものとは思はれなかつた。善良なる風俗を亂すものとして、廣く人の目に觸れる事は許さるべくもなかつたし、作者自身も自分の好奇心を満足させ、慾情の昂奮に耽る興味から描いたので、外に目的は無いしあつた。三田は人を人とも思はない女が、如何いふ態度でそれを

讀むか、少からぬ悪戯氣分で見守つた。

當の作者の少年は、作品の内容がたゞならないものなので、原稿が女の手に渡ると、すつかり上氣してしまつたが、讀む方は存外平氣で、微笑を浮かべながら一枚々々めくつて行つた。

「これ貴方がお書きになつたんですつて。まあ、随分大膽だわねえ。」

讀終つて、原稿から顔をあげた女は、直接少年作者に讚嘆の聲を送つた。大きな目は、特殊の感激に輝いてゐた。少年は眞赤になつてうつむいたまゝ、返事も出來ない様子だつた。

「つまりこれは作者の體驗なんで御座いますか。」

明かに少年の羞しがつてゐるのを面白がる不良な態度で膝を進めたが、作者は益々恐縮して、

「いゝえ、左様いふわけではありません。」

と低い聲でつぶやくやうに答へたばかりだつた。

「おかくし遊ばさなくてもよろしいぢや御座いませんか。おほゝゝゝ」

ツリツリと響く聲で笑つた。三田はあつげにとられて、その場の景色を傍観してゐた。朝も晝も食事をしない空腹の爲めにぼんやりした頭腦は、現實に目の前に展開されてゐる世の中の一部だとは考へないで、夢のやうな責任の無い場面としか思はなかつた。見ず知らずの自分に手紙を寄せ、想ひに惱むといふ意味の言葉を盡した女が、此のはでな、明い無邪氣なのか圖太いのかわからない女なのかと思ふと、愈々夢の心持だつた。彼は密に處女と處女でない女とを、その姿態と容貌で見分ける事が出来ると思つて居た。ところが今日の前に坐つて居る女は、肉體の何處にも弛んだ處がなく、まるつきり子供らしい格好の肩つき腰つきであるが、その態度には到底もむすめらしさは残つてゐなかつた。それにひきかへて、此間の晩の難波橋際の珈琲店に於ける景色や、創作「體驗」によつても想像される早熟の少年の方は、どう考へても経験家ら

しく思はれるのに、堅く膝を締めて坐つたきりで、何を云はれても上氣して返事も出ないところは、かへつて清純を保つてゐるやうに見えるのである。よく世間で、貞潔を守つてゐるかごうかは、鼻の頭を押へて見ればわかるといふが、ほんとかしら——三田は不圖途方もない事を考へた。いきなり二人の襟首をつかんで引寄せて、柔かきうな鼻の頭を、力任せに押して見度かつた。

何のとりとめた話も無く、二三時間も坐り込んでゐたが、突然女が暇乞ひして歸ると、間も無く少年も近日の訪問を約して歸つて行つた。

## 九の十

松宮花代は再び三田を訪れもしなければ、手紙さへ寄越さなかつた。涙にくれて認めたとはいふ思慕の情をつくした最初の手紙を、時折取出して讀みかへして、三田は苦笑を禁じる事が出来なかつた。どう辯護しやうとしても、自分は落第したのだと思ふ

外に途がなかつた。屢々文學少女の中に見るやうな、青春の惱みに堪へられず、誰でもいゝから相手になる人間を求め度いと思ふ矢先に、文筆の士は近寄り易く、射落し易く考へられたであらう。兵隊のやうに頑丈な髯男とは知らないで、色の白い優男とても想像したのであらう。それが事實は無愛相な書生に過ぎなかつたので、最も清く尊きものを捧ぐるに値ひしなないと考へたのであらう。三田は危きに近寄る好奇心が、現實暴露の悲哀に終つたのを流石に口惜しくも思つたのである。

古林少年は一度顔を見せたが、それも何と無くおちつかない様子で、長くは居なかつた。

「此間の女の人は、あれは先生の弟子ですか。」

彼は歸り際に突然そんな事を云ひ出した。その口調には、早くから聞き度いと思ひながら切出せなかつたらしい陰影があつた。

「弟子つていふんでもないな。」

「そんなら友達ですか。」

「さうさ、友達といふ程でもないんだが。」

三田は此の少年の前で、最初艶めかしい手紙を女が寄越したのだとは云ひ度くなかつた。

「先生も隅に置けませんな。」

云ひながら自分自身の方が赤くなつた。

「そんなんぢやないよ。」

三田も赤面した。實は嫌はれたに等しい結果なんだと腹の中で思つたのである。しかしさう云ふ弱味も、此の少年には見せ度くなかつた。彼は話を別の方角に持つて行つて、やがて相手が歸つた後まで氣がとがめた。

それつきり少年も姿を見せなかつた。

一週間ばかりたつた或日、三田の勤務先の會社へ面會人があつた。

「三田さん、面會。」

給仕の差出す名刺を見ると、××興信所と社名入で、松宮欣造と書いてあつた。「手前は花代の父で御座います。」

應接室の椅子にかけた、蒼黒い顔色の、如何にも世渡りにあくせくしてゐさうな男は、三田を見ると叮嚀に挨拶して、金縁の眼鏡の奥で探るやうな眼付をした。

「早速で御座いますが、花代は貴方様の所へ伺ひは致しませんでしたらうか。實はお宿の方へ今朝程一寸伺ひましたのですが、こちらへお勤めと承りまして……」

揉手をしたり、齒の間に呼吸を吸ひ込んだりする様子は、會社の重役だと娘の云つたには似ず、どうしても永年の月給取で、且一生月給取で終りさうな人物にしか見えなかつた。云ふ所に據ると、娘は昨日の午後近所に買物に出たきり歸つて來ない、心當りを探してもわからない、ついぞ今日迄浮いた様子もなかつたので、まさか色戀の沙汰ではあるまいと思ふが心配であると、妙に話上手な父親は、聲に充分の抑揚をつ

けて云ふのだつた。

「ところが當人の手文庫から、貴方様から頂いた手紙が出て參りましたので……」さう云ひながら、鼠色のモーニング・コートの内懐に入れてある一通を取出して卓子の上に置いた。薄紫の西洋封筒の裏には城西館の町名番地の下に、三田と書てあつた。

### 九の十一

手紙の文句は簡單だつた。

此間はほんとに嬉しかつた。城西館の二階の一室に感謝する。其處に美しき友を見出さうとは想像もしなかつた。ましてや、先に歸つたと思つたその人が、天滿橋のねきで待つてゐようとは。運命なんて古臭い言葉は使ひ度くない。戀を享樂するのは人間の力である。僕は手紙でセンチメンタルな事なんか書くのは嫌ひだ。それよりも逢つて生きた聲をきく、生きた情熱に接しなくてはならない。それで吾々の生

活を最も豊富に幸福にする事である。何時？何處で？直に返事を下さい。T 生

松宮欣造の話すところに依ればそれが唯一の手がかりで、相手の住所と姓名はわか  
つた積りで、直さま飛んで行つたのが今朝の事だつた。若しかすると、三田といふ男  
の家に花代を見つけ出す事が出来るかもしれないと思つた。大體見當をつけて行つた  
近所で尋ねても、三田といふ家は見つからなかつたが、番地を辿つて行くと、手紙の  
中に名の出てる城西館にぶつかつた。それで下宿屋だとわかると、愈々花代は此處  
にゐるのに違ひ無いと思つた。しかし取次に出た者の話で、三田は勤人で、晝間は會  
社の方にあると聞かされ、又眞直に此處に驅けつけたのだつた。

「實はまだまだ若い學生さんか何かと思つてゐたので、御目にかゝつて不思議に感じ  
て居りますが、矢張り貴方様がその三田さんで……」

他人の機嫌を兼ねる事が多年の習慣になつてゐるのであらう、娘の行方を探す父親ら  
しく無く、何か商品を賣りに來た商人の態度で、揉手をしながら疑はしい顔付をした。

目の前につきつけられた手紙を読んで不機嫌になつてしまつた三田は、その手紙の  
ぬしに對し、花代に對し、且又花代の父だといふこの貧弱な會社員に對して、徹頭徹  
尾許し難く思つた。寄つてたかつて自分一人を馬鹿にしてゐるのだとさへ感じた。

「えゝ私は三田です。三田には違ひ無いんですが、こんな手紙を書いた覚えはありま  
せん。私は貴方の方のところのお嬢さんに最初手紙をつけられた男なんです。」

相手が自分を疑ひながら、しかもはきはき口をきかないのが腹立たしく、彼の物言ひ  
はづけづけしてゐた。この返答を解し兼ね、松宮欣造は愈々疑はしい目付をして見守  
つた。三田は苛々しながら、そもそもからの事の起因を説明しなければならなかつた。

彼が樟喬太郎の筆名で小説を書く事、その小説を読んで手紙を寄越す人がある事、  
花代もその一人だつた事、間もなく下宿に尋ねて來た事、席上でこれも小説を機縁に  
して出入する少年古林と落合つた事——娘を連れ出したのは三田だと思つてゐる飲み  
込みの悪い相手を納得させる爲めに、幾度も眼目を押ながら一部始終を説き明した。



「へえ、さう致しますと貴方は小説家で、その小説家の貴方に手紙を蓋上げたのが手前共の娘で——は、あ成程。」

松宮欣造は一々大仰にうなづいた。

「ではこの手紙は誰が書きましたもので御座いませう。その古林とやらで御座りませうか。」

「さうでは無いかと心配してゐるんですがね。」

それに違ひない事は筆蹟でもわかつてゐるのだけねと、三田は目前にゐない人間の事を兎や角いひ度くないと思つて言葉を濁した。

「いやどうも申し譯の無い事で。實はそのやうな悪い奴があらうとは存じませんで、この手紙を見た爲め、てつきり貴方様に違ひないと睨んだので御座いますが、松宮欣造一生の失敗でした。」

髪の毛の薄い頭を掻いて、彼はてれかくしに苦笑した。

## 九の十二

三田は不快で堪らなかつた。

彼の説明を聞いて、ひた謝りに謝つて歸つた松宮欣造の姿が、事務室の机の上にも帳簿の上にも陰影を残して行つた。念の爲めに訊ね度いといつて古林の家の番地を聞いて行つたから、今頃はもう先方に着いたであらう。連れ出したのが古林少年が、連れ出されたのが古林少年か、何れにしても彼の二人が、手に手を取つて身をかくした事は明白だつた。紺がすりの羽織に海老茶の紐を結んだ少年と、紫矢がすりの少女との密會を想像すると、或種の秘密繪が描き出す濃厚な色彩が彷彿としてあらはれる。その忌々しい想像を追拂ふやうに、三田は幾度となく舌打ちした。

餘程たつてから、松宮欣造から電話がかゝつて來た。三田の會社を辭して、その足で古林の家に行つて見ると、此處でも同じ時から息子が見えないので、母親は夢中に

なつて心當りを探してゐるところだつた。其處で三田から聞いた話をして、双方とも娘と息子は何處かしらに、一緒にゐるに違ひ無いといふ事丈は了解したが、扱て何處にゐるのか、無分別な事をして呉れはしないかといふ心配に惱まされてゐるのだつた。「おふくろさんといふ人はえらく我の強い御方でしたな、自分の所の息子が人の家の娘をだまかして逃げたくせに、私をつかまへて、貴方の所の娘さんがうちの伴を連れ出したのだといつてきませんのです。いやはや、ごうも。」

松宮欣造は電話口で、再び髪の毛の薄い頭を搔いて恐縮したらしかつた。さうして若しも何か三田の方に手がかりがあつたら、直ぐに自分に知らして呉れと、しつゝこゝく繰返して頼んだ。

下宿に歸つても、三田は矢張り不愉快だつた。長い間苦しんだ長編小説を片づけた安樂な心持で、その小説の執筆中は、手に取るひまも無かつた雑誌の積みたまつたのを、無責任に寝轉んで讀まうと、ひとつの樂みにしてゐたのだが、思ひもかけない事

に亂された気分は、なかなか靜まつて呉れなかつた。彼は疲れた體を倒して、開いた雑誌は讀みもせず、一人前の大人にもならない男女が、いち早く知つた秘密の世界に、不覺な想像を誘はれ勝だつた。男同士口をさくのものにも、色白の頬邊を染める羞らひ勝な少年が、自分の名前をかたつて出した手紙の意氣の鋭さは、意外といふよりも出しぬかれたといふ形だつた。あの手紙によつて想像すれば、この下宿に落合つた二人は、一足先に歸つた女の方が天満橋で待つてゐて、そのまゝ手取早い戀を語合つたものらしい。最初の手紙でも不良らしく思はれたには思はれたが、女のしうちも、あまりに人を馬鹿にし過ぎてゐる。徹頭徹尾、三田の役廻りは悪かつた。何處に姿をかくしてゐるのか——大阪かしら、京都かしら、若しかして身の處置に困つて無分別な事をしはしないだらうか……

「三田さん、お客さんだつせ。」

それからそれと止度なく小説らしい筋道を辿つて考へてゐる折柄、がらりと襖をあ

けられて、彼はあわて、飛び起きた。

お梅の後から入つて来たのは、何處にかけ落したかと想像してゐた古林豊太郎だつた。

九の十三

古林少年は何時もの通り、紺がすりの着物に紺がすりの羽織で、海老茶の羽織の紐をいぢりながら、持前の羞しがりの様子を見せても、別段悪びれもしずに、三田の前に坐つた。かへつて三田の方が、不意の侵入に度膽を抜かれた形で、稍暫らくは何と口を切つていゝか見當もつかず、徒らに胸がわく／＼した。直ぐにも引つかまへて白状させ、親達に引渡してやらうかとも思ひ、何も知らない顔をして、相手が如何いふ態度に出るかを見てやらうとも思つた。互に押黙つたまゝ様子を探りあつて居た。

「先生。今晚はお願ひがあつて伺ひました。」

沈黙の對座に堪へられなくなつて、少年は白い顔をあげて口を切つた。

三田は相手が口を開くのを待つてはゐたのだが、いざ先方が先に沈黙を破つたとなると、先手を打たれたやうな胸騒ぎがして、これはしまつたぞと思つた。愈々花代とのいきさつをうちあけて、戀のとりもちを頼むのであらうと考へたのだ。

「随分う／＼しい話なんですけれど、私の原稿を買つて頂けないでせうか。」

意外な少年の要求に、三田は又驚かされた。

「先生が買つたつて役に立たない事はわかつて居るんですけれど、今金銭が無いと困るんです。お母さんにいふても出来ん事はないのですが、先生だど一倍都合がいゝのです。先生は又それを雑誌なり新聞なり、引取る所へ賣れば御損は無いかと思ふんですが……。」

「思ひ決して言ひ出しはしたものの、流石に言葉はこんがらかつて滑かには續かなかつた。聞いてゐるうちに、三田は漸く何の爲に彼がやつて来たか見當がついた氣がし

た。

「君の原稿を買ふのか。」

あんまり虫のいゝ小商人じみた相手の申出でに憤慨して、多少皮肉に出てやり度かつた。

「いえ、買つて頂かんでも、少し金銭を借して頂けばいゝんです。」

少年はあわてゝ申譯をした。

「つまり、金銭が入用なんだね。しかし其の金銭は何に使ふ積りです。」

「友達が困つてゐるものですから。」

存外落ちついて少年は答へた。畜生嘘をつくなど、嘘をつかれる事の大嫌な三田は物を言ふ時には自然に顔面に紅味がさして、さも内氣らしく、羞らひ勝に見える相手の綺麗な顔を、面憎く思つた。

「どんな友達が、どんな風に困つて居るんです。」

思はず知らず底意地の悪い詰問をしてしまつて、口に出してから自ら耻ぢた。

「そんな嘘はよしたまへ。何も彼もわかつてゐるんだ。」

三田はあわてゝ取消して、單刀直入に、事件の真相を打ちあけてしまへといふ態度に出た。相手はびつくりして、やゝ暫らく三田の顔色をうかゞふばかりだつた。

「一體何處にかくれてゐたんです。色戀沙汰も止むを得ないが、他人の名前をかたつたり、金がなくて嘘をつくやうな根性はよろしくない。僕は、さういふ事が大嫌ひだ。」

たゞうつむいて恐縮してゐる相手に對して、三田は真正直に憤慨した。

## 九の十四

「先生、えらい済みませんでした。」

餘程たつてから、少年は思ひ決した態度であやまつた。うなだれた細い首筋を見て

居ると、全く参りましたと観念したものの、やうに見えた。さう思ふとい、氣持だつた。三田は、自分の力で悪行を改心させたやうな氣持がした。

「一體全體どうしたんです。君のうちでも、松宮のうちでも、可愛い子供がゐなくなつたんで大騒ぎをしてゐるし、僕にしても下らないかゝりあひにされて大迷惑だ。何でもいゝから残らず喋つてしまひたまへ。」

「えらい濟みません。」

もう一度頭をさげて、稍暫く躊躇してゐたが、三田の追窮に逃れられず、最初此の下宿で花代と落合つた日の馴染から、今の今迄のいきさつを、残らず打あけなければならなくなつた。

あの時三田のところを辭した少年は、電車の停留場迄急いで行くと、一足先きに歸つた花代が、何氣ないふりをして佇んで居るのを見た。どうしても、自分を待つて居たものどし考へられなかつた。挨拶をして並んで電車を待つたが、お互に相手の心

持がゆかつたの下、遂々電車には乗らずに、何時かの晩三田と歩いた同じ道を中之島公園の方に行つた。

その晩は千日前の活動寫真を見て別れたが、直ぐに手紙で示し合せて又逢ひ、更に又逢ひ、——その中に、夜々散歩したり活動寫真を見たりしてゐるばかりでは面白くなくなつたので、お互にいくらかの金を持出して、和歌の浦か、京都か、も一つ思ひ切つて東京にでも行つて見やうと約束して、無難作にうちを飛出した。

「ところが先生、私はうちでお金が貰へなかつたので、向ふが持つて来るだらうと思つてゐたら、向ふは向ふで、私をあてにして一文も持つてゐないんです。困つちまひました。」

少年はさも困つたと云ふ形で、頭を掻いて苦笑した。肝腎のそれから先の話を期待してゐたが、少年は一先づ目を閉ぢてしまつた。

「ふうむ、其處で僕のところは嘘をついて借りに來たわけなんだね。」

「嘘をつくつて事もないんですが、でもあんまり變ですから。つい……」  
 狼狽てゝいひわけして、又頭を搔いた。

「つい嘘をついたのか。しかし嘘はよくない。ほんとの事を云ひたまへ。」

三田は相手が頷くのを待つて、一膝乗出した。

「ところで今は何處に居るんです。別段悪いやうにはしないから明白に云ひたまへ。今更かくしたつて爲方が無いや。」

「えゝ、もうかくしたり嘘をついたりはしません。」

さうは云ひながら矢張り羞しさうにうつむいて、羽織の紐をいじつてゐた。

「大阪の市内にゐるのかい。」

「えゝ。」

「市内は何處です。早く云つちまふさ。」

「北區です。梅田の方の宿屋にゐるのです。汽車で京都にでも行かうと思つて停車場

迄行つて、切符を買ふ時になつて初めて兩方ともお金を持つてゐない事がわかつたのです。」

「さうか、そんなところに居たのか。」

あんまり間近にゐたのが、一層人を馬鹿にした所爲に思はれた。扱て居所はわかつたが、これから如何したらいゝのだらうと、三田も些か當惑した。

## 九の十五

「兎に角一度めいめいのうちに歸つて、それから先の相談にしたら如何だらう。」

斯ういふ場合にのぞむ年長者の心持で、わけ知りらしい口をきくのが、不思議に得意な氣持もした。

「雙方が好き合つたものなら、僕から君のお母さんや、松宮のうちの方にも、よく飲み込むやうに話してやつてもいゝ。」

「いえ、何も話して頂く事なんかありません。あれは不良少女です。」

少年は、羞しさうに赤い顔をしながら、意外にきつぱりと断定してしまつた。其處には何の未練も執着も残つてゐない語調だつた。

すべてが三田には想像の外だつた。古めかしい人情本や家庭小説の筋書が先入主になつてゐる頭腦で、若い二人は夫婦になり度がり、その親達は承知せず、一拥着起る仲に入つて、雙方から頼母しがられるのが自分の役だと、内々考へないでも無かつたから、斯う簡単に見きりをつけられては、張合ひが無かつたのである。

「君だつて不良でない事もないぢやないか。」

彼は中腹で相手をたしなめてやつた。

「いやあ、やられたなあ。」

少年は無邪氣な笑聲を立て、頭をかゝへた。

「さうか、そんなのが。僕は後始末の面倒に迄引つかゝらなければならぬかと思つ

て心配してゐたんだが、それなら問題は簡単だね。」

眞面目に惚れたり、惚れられたりするのよりも、不良同志のいたづらの方が、かういふ時には拘はりが無くて結構だと思つた。

「簡単ですとも、宿賃さへ拂ふ事が出来れば、それでいゝんです。」

氣難しい三田の様子が、多少なりともくだけて來たので、少年も安心した様子だつた。

「よし、よし、僕が拂つてやらう。」

寧ろいゝ御機嫌で、三田は懐中の財布の重さを考へた。長編小説を新聞社に賣つた代金が、未だ手つかずにあるのだつた。

「しかし宿賃は拂つてやるがはりに、今晚にも別れて、めいめいのうちに歸るんだぜ。それが條件だ。」

「えゝ歸りますとも。金は無いし、何時迄宿屋にゐたつて面白い事もないから、もう

自分一人でもうちに歸つてしまはうかと思つてゐました。」

少年の言葉は愈々三田を驚かせた。見かけによらない太い奴だなと思ふと、こんな奴等の清純をためす爲めに、鼻の頭を押へて見度く思つた自分の人のよさが馬鹿々々しかつた。

「では一刻も早い方がいゝ、一緒に行つてかたをつけてやらう。」

三田は直ぐにも兩方の親達に引渡して安心させてやり度くもあつたし、又二人がどんな様子で、どんな所に泊つたかも見てもやり度かつた。殊に自分が出かけて行つたら、花代はどんなに驚くだらうと考へると、少からぬ興味もあるのだつた。

「先生も行くんですか。」

少年は迷惑な様子で、不平らしい顔さへ見せた。

「行くとも。君の方では金だけ貰へばいゝんだらうが、さうはいかないよ。何から何迄結着をつけてしまふんだ。」

云ひながら彼はもう立上つて帯を締め直した。

## 九の十六

戸外はおあつらへ向の春の夜だつた。町の上にかゝる靄の中に、無数のあかりがきらめいてゐるのを見下しながら、阪道を下りて行つた。並んで行く少年は何を考へて居るのか知らないが、三田は宿屋に行つてからの自分の任務を思ひ、又如何云ふ態度を執らうかと考へると、なかなか安心は出来なかつた。

淀屋橋から大江橋を渡つて、梅田新道近くなつた時、古林少年は不意に立どまつて、

「先生、私一人で行かして貰ふ事は出来ませんか。」

もう一度嘆願して見ようと云ふ様子で、下からのぞき込んで訊いた。

「今更そんな事を云ふものぢやない。覺悟が悪過るぢやないか。」

少年は叱られて、頭を掻きながら電車道を横切つて細い横町に入つた。薄暗く靄の



漂ふ空地の角を曲る時、三田の腦裡に過ぎた日の景色が判然と蘇へつて來た。去年の秋大阪に着いた翌日、下宿探しに歩いた場所に相違なかつた。

「先生、此の家なんです……」

案内役が行んだ格子戸の上には杉の家と白字を抜いた赤硝子の軒燈が出てゐた。曾て三田が、室を求めて見に來た事のある連込み宿だつた。ちひさい瓢箪池のある中庭の向うの小座敷から、寢衣のままの男女がもつれ合つて出て來た記憶は未だに新しかつた。

「なあんだ、こんな所に居たのか。」

「先生知つてるんですか。」

「知つてるつて事もないけれどね。色の白い大柄の丸髻のおかみさんが居るだらう。」  
俺の目の届かない所は無いんだぞと云ひ度いやうな心持だつた。

三田は逡巡して居る少年を顧みながら、自分が先に立つて格子を開けた。飛石を踏

んで玄關にかゝると、少年は狼狽して擦りぬけて、馳込むやうに障子をあけて上つた。

「お歸りですか。」

果して色の白い大柄の丸髻の女房が出迎へた。一人だと思つた少年の後に、大男が立つてゐるので、判断に苦しんだ様子だつたが、

「お越し。」

と軽く頭を下げて、上眼づかひにじろじろ見るのだつた。先方では覺えて居ないらしかつたが、三田にこつてはまぎれも無い去年の秋の一日の記憶に浮ぶかみさんだつた。

廊下を少年の後からついて行くと、夜だから金魚の姿は見えないけれども、中庭の池は薄あかりに光つてゐた。恰も彼の時の男女の居た室に、此の二人も泊り込んで居た。少年は障子に手をかけて、又ためらつたが、如何にも爲方が無くなつて開けた。「あら歸つたの。随分遅かつたわねえ。」

ものうい聲は花代だった。此の間と同じ矢がすりの對の着物と羽織で、室の真中に腹這ひになつて、菓子鉢の中に残り少い煎餅を喰べながら、雑誌を讀んでゐた。

「今晚は。」

三田はいきなり聲をかけて室の中に入った。

「あら……」

全く思ひもかけない侵入者に驚いて起上つたが、紅い襦袢の下からはみ出して居る膝つ子にも氣のつかない程狼狽してゐた。

### 九の十七

八疊の室は亂暴に取散らしてあつた。宿の浴衣や丹前は、亂箱にも入れないで、一隅に脱ぎつばなしにしてあるし、何時喰べたのか芭蕉の皮は、新聞紙の上に黒く腐つてゐた。今迄寝轉んでゐた花代の頭のあつた邊には、サイダアの瓶も轉んでゐた。煙

草の煙か、白粉の香か、人間のいきれもまじつて、むつとする程空氣は濁つて居た。

三人は稍暫く、めいめいの立場を互にやり切れ無く思ひながら向ひ合つて坐つてゐた。その間花代は屢々豊太郎の方に目を使つて、どうして三田が現れたかを問ひ糺し、咎めだて度い様子だった。少年はその様子を知つて知らないふりをして、ついぞ三田と差向ひの時にはふかさなかつた巻煙草を吸つて横を向いてゐた。丸髷のおかみさんがお茶を運んで來ると、始めて救はれたやうな顔をして、

「先生、麥酒でも貰ひませうか。」

と存外物馴れた口をきいた。

「いや、それには及ばない。何も欲しくない。」

手を振つて斷つて、かみさんの立去るのを見極めてから、

「そんな暢氣な事を云つてる時じゃない。早く勘定をして引上げよう。」

と腹立たしさうに云つた。一文も無くて自分の所に借りに來た奴が、酒々として麥

酒を命じようといふのが小面憎くかつた。

「直ぐに勘定書を貰ひ給へ。」

「では一寸帳場に行つて來ます。」

手近に呼鈴があるにも拘らず、其場を逃げるやうに立つて行つた。

「まあ、彼の人先生の所へお金を借りに伺つたんですか。」

黒目の部分の多過る程黒い目をみはつて、花代はばつの悪さを媚笑にまぎらしながら親しげに口をきいた。

「私、こんな所に連れて來られるなんて思ひもかけませんでしたわ。一日京都に遊びに行かうつて誘はれたものですから、晩にはうちに歸れると思つて、つい出て來てしまひましたの。すると彼の人お金が無いもんですから、私に汽車賃はあるかなんて云ふんでせう。私もあいにく持合せがありませんので、それぢやあ一休みして、それから友達に借りて來るつて、こんなうちに連れて來られたんです。」

自分の罪では無いと云ふ事を飲み込ませやうと、早口に雄辯に喋つたあげくに、  
「彼の人不良少年ですわ。」

と聲をひそめてつけ加へた。三田はあつけにとられて女を見守つた。厚白粉の斑になつた顔に、花代はあらん限りの媚を浮べて、ちいつと見返した。

「貴女だつて不良で無い事もないでせう。手もなくこんな所に泊り込むなんて。」

三田は苦々しげに、ぶつとけに云つてやつた。

「あら、先生ひとござんすわ。お金が無くては勘定が出來ないから歸れないつて彼の人云ふもんですから、仕方なしに泊つたんですけれど、私處女のほこりは捨てはしません。それ文は先生に誓ひますわ。」

熱心に身の潔白を信じさせようと、一際乗出した處に、古林少年は勘定書を手にして歸つて來た。

九の十八

一夜の宿泊料の外に、無闇に間喰ひをした勘定書を見て、  
「それでは之で勘定をして、相當の茶代も置いて來給へ。僕は此の人を天王寺迄送つて行くから。」

三田は懷中から財布を出して、相當の金額を古林少年に渡した。なるべく早く此の二人を引離してしまはなくては安心出來なかつた。

「さ、行きませう。僕はたゞ貴方が二人を引離す役廻りだ。小言はてんでにうちに歸つて聞き給へ。」

斯うなつたら早いに限ると思つて、彼はいきなり立上つた。

「先生一寸待つて頂戴。」

もう如何しても連れて行かれる身だと思つたのであらう、花代は手早く懷中鏡と白

粉刷毛を取出して、鼻の頭や襟首を丁寧に塗直し、亂れた髪を搔上げた。

「では、私先生と御一緒に行くわ。」

三田の目の前で、ごんな態度を取るのが穩當だらうと氣を揉んで居る様子は明かだつたが、それを押切つて少年の側に寄つて、機嫌をうかゞふやうな口をきいた。少年は眞赤になつて、人前でそんなにされては困ると云ふ風で、花代には答へずに、逃腰になりながら、三田の方に向いて頭を下げた。

「先生、どうもいろいろ濟みませんでした。」

「ほんとに濟まないと思ひ給へ。さうして君も直ぐうちに歸つてお母さんに安心させ給へ。左様なら。」

花代をせき立てるやうに、三田はさつさと廊下に出た。

「それぢやあ、私行くわ。」

女はもう一度同じ事を繰返して念を押して見たが、少年はたゞ頷いたばかりだつた。

「左様なら。」

「左様なら。」

こんな場合に芝居ならば、とついたり引ついたり、互に手を取つて別れともながるんだらうが、三田は廊下に行んで呑氣な事を考へてゐた。しかし實際は、何の愁嘆も無く、さばさばした顔付で、若い二人は彼の後について來た。

「まあ、お歸りで御座いますか。おかまひも致しませんで。」

足音を聞きつけて、おかみさんも驅け出して來たが、少年に何とか説明を聞かされたと見えて、別段不審な顔付もしてゐなかつた。

「おや、お天氣が變りますかしらん。」

玄關の障子を開けて、半分體を外に出し、二人の穿物を揃へながら、愈々露の深くなつた夜の空を仰ぎ見た。

「曇つてゐるんぢやないでせう。朧月夜といふやつですよ。」

三田は捨せりふを残して出た。

「又おこしやす。」

といふ聲を後に聞いて往來に出た。歩き出すと、花代は直に外套の袖に纏るばかりびつたりと身を寄せて來た。誰が見ても、二人の間には特別に親しい關係がありさうに思はれさうで、三田は無關に電車道に急いだ。

「先生送つて下さいませすの。」

花代はほんとに外套の袖に手をかけて訊いた。

「え、不安心ですからね。」

その手を振切るやうな勢で、三田は折よくやつて來た電車の方に向け出した。

九の十九

何時もこみ合ふ電車に、其の晩もこみ合つて居た。僅の隙間に小柄な花代を割込ま

せて、三田は稍離れて釣草にぶらさがつてゐた。三つ四つ停留場を過るうちに、具合よく花代の隣の男が降りる爲めに席を去つた。

「先生、こちら。」

二三人、その席をねらつて運動を起したのもあつたが、いち早く花代の半音階高い聲が響いたので、みんな一時に躊躇した。

「先生、おかけ遊ばせ。」

もう一度呼びかけられて、三田は並んで腰かけはしたものの、先生々と云はれる爲めに、あたりの者の視線を一身に浴びて閉口してしまつた。左隣には脂肪肥りにふとつた婆さんが、大きな風呂敷包を抱へて、腰かけの上に横向に坐つてゐて、三田の脇腹にお尻がつかへてゐた。彼は體を成るたけちいさくしてゐたが、右からは花代が人の見る目も憚らず倚りかゝるやうに體をもたせかけるので、外套を通し、着物を通して、柔かい女の肉體の、温度も肌觸もひしひしと迫つて来る。此の生温かい體は、

未だ發育し切らないやうな相手の手の中にあつたのかしら——三田はふと、古林少年と花代が過した一夜の景色を想像して、むらむらと不愉快になつた。

電車を降りたところで、花代は家も其處から遠くは無いから、一人で歸れると云つた。

「ほんとに難有う御座いましたわ。私彼の人につかまつて、これから如何なるのかと心配して居りましたの。」

夜目にも眞白く塗つた顔を近々と差寄せて云つて、叮嚀に頭を下げた。しかし、三田はそのまま手放すのが危険な氣がして爲方が無かつた。若しかすると、悪智慧の發達した奴等は素早くしめし合せて、うちには歸らずに又一緒になる工風をしてゐるかもしれない。うつかり逃してはならないぞと、自分自身を警めた。

「兎に角私は貴方の家迄行きませう。無理にも送り届けます、御宅の方に逢つて、又面倒な挨拶なんかされるのはいやですが、門口迄は何と云つても行きます。」

「まあ、先生、おほくくく」

あんまり眞面目な三田の様子に、花代は體を二つに折つて笑つた。往來の人が振りかへつて見て行く程、響く笑聲だつた。

「それでは送つて頂きますわ。」

迷惑だが爲方が無いと云つた調子で、花代は先に立つて歩き出した。あんまり來た事の無い方角で、おまけに夜の事だから、三田はさつぱり見當が付かなかつた。二度三度折曲つて、段々細い路に入つたが、或る町角の郵便函の所で花代は足を停めた。

「難有う御座いました。あそこに格子が見えませう、あれが私のうらで御座います。」指さす向ふにさくやかな家が見えた。

「一寸でよろしう御座いますから、お寄り下さいませんか。先生に救はれて無事に歸つた事を父にも話し度う御座いますわ。」

「まあ止めませう。貴方が格子戸の中に入るのを見届ければ、それで安心です。私は

家庭のいざこざにかゝらぬものは御免です。」

「では爲方が御座いませんわ。先生、いづれ改めて御禮にうかゞひます。難有う御座いました。」

又叮嚀に頭をさげて二三步行きかけたが小走りに戻つて來て、

「先生、ほんとに處女のはこりは捨てなかつたんで御座いますよ。それだけは御信用なさつて下さいまし。ね、先生。」

外套の袖に繞つて、接吻を迫るやうな格好だつた。三田はまるつきり信用してゐないので、餘りの馬鹿々々しさに返事も出來なかつた。

「先生、疑つてらつしやるの。非道いわ。」

恨みがましく云つたけれど、矢張り三田は答へなかつた。

「先生、これだけはほんとで御座いますわ。指切り。」

いふかと思ふと、いきなり三田の外套の下に手を入れて、指に指をからんだ。

「では、左様なら。」

その指に力を込めて振つて、やうやく放すと、空氣草履の音を立て、馳け出して、今しがたさし示した格子戸の前で一度止つて、頭をさげて、直にその家に姿は消えた。見送り果てて、三田は暫時佇んだが、後は如何ともなるやうになれと思つて歩き出した。

大空の雲が切れたのであらう、横手にそそり立つ天王寺の塔の上に、露にかすんだ春の月がぼつかりと浮んでゐた。

十のー

歐羅巴の戦争のおかげで、諸物價の高くなるに連れ、原稿料も以前とは比較にならない程よくなつた。三田は、長編「世相」に對する報酬として、以外に多額の金を受取つて俄に氣が大きくなつた。平生不自由をしてゐたから、身に着ける物も不足だつ

たが、そんな必需品よりも、もつと贅澤につかひ度かつた。ひとつ思ひ切つて、大阪の有名な料理屋を順々に喰べて廻らうかとも考へたが、一流のところでは適當な紹介者が無ければ座敷にも通すまいし、一人つきりで床の間をしよつて坐つてゐるのも窮屈だらうし、それよりも身分相應な所で、田原でも引張り出していつばいやる方がましかしらん——とりとめも無く空想する丈でも、懐中の豊かな事は樂しかつた。田原がいゝ、こんな時には彼の男に限ると思つてゐると、久しく顔を見せなかつた友達が、先方でも逢ひ度くなつたと見えて、或晩、會社の歸りに遊びに來た。

「實は原稿料が入つたもんだから、近日君に御馳走してやらうと思つて居たんだ。」  
「僕も蛸配當のわけまへにありついたので、君に御馳走してやらうと思つてゐたんだせ。ふうむ、お互に成金だなあ。」

田原は自分の意見が通らないで、大株主の思ふまゝに蛸配當をした事を、何時迄も不快に思つてゐた。そんな不淨な金は、さつさと費消してしまふに限ると思つてゐた。



蝸配當に端を發して、田原は自分の意のやうにならない會社の近狀を慷慨悲憤の調子で話し出した。前々から職工の待遇については、人一倍意見を持つてゐる田原の理想論は、なかなか實現されさうも無かつたが、それよりも急を要するのは、此の頃の急激な物價騰貴に對應する丈の割増賃銀の支給と、西洋の事情に刺戟されて次第に堅い要求となりつゝある労働時間の制限だつた。慾に目の無い株主や重役側は、此の好景氣に乗じて手取早く儲けようとするばかりで、一つとして使用人の要求を聽かうとはしなかつた。しかし之等の要求は、雑誌や新聞で原稿料を稼ぐ經濟學者だの、社會主義者だのの意見の發表に勢ひを得て、流行感冒の如く瀰蔓した。田原の會社でも、賃銀割増と、八時間労働並に夜業廢止の要求が、萬一拒絶すれば同盟罷工だぞといふ脅しと共に提出されて、未だに解決がつかないのであつた。彼はその爲めに日夜奔走して寸暇もなく、三田に御無沙汰勝なのも其の爲めだといふのであつた。

「どうしても一度は同盟罷工をやつて呉れなくちやあいかんよ。」

此の重役は、寧ろ其の同盟罷工の先達になつて活動し度い血と熱さを持つてゐた。

「へえ、事態切迫だね。其處に行くと僕なんかは艶めかしい事件にかゝづらつて寸暇も無しといふ有様なんだぜ。」

三田は机の曳出しを探つて、松宮花代から寄越した手紙を取出して見せた。

「ふうむ、怪しからんもんだなあ。」

田原は世の中には斯うした大それた娘もあるのかと驚いた様子で、誰が見ても、纏綿たる情緒を盡したものとしか思へない手紙を嘆息して讀んだ。

「私は女の最も清く尊き犠牲を捧げる事を喜んで致します——か。怪しからんなあ。」

その手紙の主が下宿にやつて來た事、古林少年の事、二人が何の道行も無く握手した事——一場の喜劇の顛末を、三田は事細かに話して聞かせた。

「なあんだ、結局樟先生は逢引宿の支拂をしよつた丈の役廻りか。馬鹿々々しいなあ。」

田原は腹を抱へて笑つた。實際、天王寺の塔の上の春の夜の月を仰ぎ見た時が最後で、花代も古林少年も姿を見せず。その親達も挨拶にも來なかつた。恐らくは奸智に長けた二人は、親達には三田のみの字も聞かせなかつたものであらう。夜の更ける迄田原は上機嫌で喋つて、次の日曜の會合を約して歸つた。

## 十の二

約束の日曜には、三田は朝のうちに身支度をして待つてゐた。時間はきめはしなかつたけれど、午後になれば田原の方から誘ひに來て呉れる事になつてゐた。待たれるよりは少しはましかだけれど、待つのは氣がおちつかなくて、いゝものでは無かつた。爲様事なしに、眞青に晴れた空が、あけ放した窓に近く輝いてゐるのを見ながら、寢轉んで居るうちに、日ざしも斜になつてしまつた。

今日は田原を何處に引張つて行かうかしら、思ひ切り贅澤をして見度いな——つい

ぞ持つた事の無い金が懐に入つて以來、屢々浮ぶ妄想を淺ましく思ひながら、矢張り何時の間にかその中に引入れられてしまふのだつた。彼は財布の中の札の束を取出して數へて見た。眞新しい十圓札は、新聞社から貰つた時より三四枚減つただけで、皺も寄らずに揃つてゐた。それ程の金を持つてゐるといふ自覺と、それを幾度も數へる自分の心の卑しさに、三田は人知れず赤面した。

「三田さん、お電話だつせ。」

襖をあけて、半分顔を出したおれんに呼ばれたので、三田は一層どきどきして、臉も耳も熱くなつた。狼狽して財布の中に札を突込んで立上つた。

直ぐに廊下に飛び出して、梯子段の下の電話口にかけてつけた。づきんづきん響く程高い調子の相手は田原だつた。

「濟まん、濟まん。長尻の客が來て歸らないものだから、ひどく待たせてしまつた。」彼は先づいひわけをしてから、下宿に來る約束ではあつたが、そんな事で時間が遅

くなつたので、てんでに落合ふ場所に行く事にし度い。其の場所も顔を合せてから相談する筈だつたが、實はかねがね一度は行かなければならない所があるので今日は自分を主人にして御馳走させて呉れと云ふのだつた。

「先づ僕の不浄金を散じ、此の次には君の辛苦の稿料に及ぶ事にし度いんだ。」

長々と喋る相手に對して、三田はおちつきを失つてゐた。今の今狼狽して机の上に置いて來た財布と、自分を呼びに來たおれんどが結び付いて、心配の種になつた、蠶癖のある者の目の前に、財布を置きつばなした自分の不注意は許せない氣がした。どうか無事であつて呉れと念じながら、彼は田原のお喋りを憎んだ。

「わかつた、わかつた。君のいふ通りにするから其の場所と時間を云ひ給へ。説明は不必要だ。」

「それがね、北の新地なんだが構はないか。」

「北だらうが南だらうがお構ひ無しだ。はきはき云つてしまやあい、ちやあないか。」

三田は相手が何かしら遠慮してゐるので、かへつて苛々して來た。

「あの何時かの晩來て貰つた處があつたらう。僕が酔拂つて醜態を演じた處さ。」

田原にとつてはそんな事も云ひ悪いらしく、わかり切つた事を引張つてゐる。

「わかつた。葉牡丹に逢ひ度くなつたんだな。」

「さういふわけぢやあないんだが、勘定もその儘残つてゐるしね……」

「いゝよ、わかつたよ。それではもう三十分もたつたら雙方あそこへ行く事にしやう。左様なら。」

三田は手早く片づけて、受話器をかけると、足音を忍んで二階に戻つた。どうか事が無ければいゝが念じながら、その時の心持では、足音を忍ばなければならなかつた。

電話を取次いだおれんは、いきなり飛出して行つた三田が、狼狽てて札束を突込んだ財布を机の上に放り出したのを見て、胸が冷くなつた。如何したらいいだらう、早く此の場を遠ざからなければならぬと、薄々は感じながら、何時の間にか其處に膝をついてしまつた。朝の間に三田が脱ぎ捨てた着物のあるのを幸ひに、それを疊みながら、早く三田が戻つて来て呉れ、ばい」と念じてゐた。

あいにく三田はなか／＼戻つて來ないで、電話の應對の大きな聲が、筒ぬけに聞えて來た。おれんは全く盗る氣は無かつたが、どうしても財布の中は見度かつた。思はず知らず手を延した時は、もう目がくらんだやうになつて、既に札の束は手の中にあつた。直ぐにその中から一枚だけを抜いて、懐に突込んだが、其の時電話の話聲はたと止んだ。

いけない、いけない、そんな事をしてはいけないと、ちひさい胸を抑へるものがあつた。おれんは震へる手でいつたん懐にかくしたのを取出して、素早く元の財布の中

の札束の間に戻さうとした時、三田の足音が微かに聞えた。狼狽てて財布の中に押入れて、机の側を飛退くと、疊みあげた着物を持つて立上らうとした。三田が襖をあけて入つて來たのは其の時だつた。

異常な意氣ぐみの三田を見ると、おれんは自然と膝をついてしまつた。耳のうしろから首筋にかけて、火照るやうな氣持がして、平氣をよそほふ積りでも、動悸が高く打つてし方が無かつた。すまして立たうと思つても、足が震へるやうな豫感があつて、どうしても立てなかつた。

三田は眞直ぐに机のところ迄行つて、いきなり財布を取上げると、立身のまゝでなかみをあらためた。一々札を勘定する迄も無く、きちんと端の揃つてゐたのが不揃になつてゐて、おまけに、他のは二つ折なのに、一枚は不規則に折られて皺くちやになつてゐた。彼は幾枚抜かれたかを問題にするよりも、盗まれたといふ事を考へる丈で口惜しかつた。しかし觀念した姿で坐つてゐる相手を見ると、哀れにも思はれた。三

田は暫時の間、黙つて考へてゐた。

「おい。」

思ひ切つて詰問してやらうと思つたが、咽喉が乾いて、樂には聲が出て呉れなかつた。斯ういふ不愉快な場面に自分を見出す事がなさげなかつた。何となく、涙が鼻につまるやうな氣持もして來た。

「何も云はないから返しておくれ。一錢でも二錢でも、盗られるのはいやだ。これはお前にやるから、そつちのは返しておくれ。」

三田は皺くちやになつた十圓札をおれんの目の前に突きつけて迫つた。いくら盗まれたのかは知らないが、盗まれた事は疑も無いと思つてゐた。

思ひもかけない三田の言葉に、おれんは吃驚して耻と苦痛に蒼ざめた顔をあげた。

「机の上にお金なんか出しといたのは此方も悪かつた。しかしさういふ事はおよし。そのかはり之を上げるから。」

彼は又皺くちやの十圓札を突きつけた。

「あて、そんな事はしません。」

うらめしさうな顔つきで、おれんは目頭に涙を浮べて云つた。

「かくしたつて駄目だよ。ちやあんど揃へてあつた札がこんなに皺くちやになるわけが無い。」

「でも私盗つたりなんぞはしません。」

おれんの目からは、容赦なく涙が出て來た。

「よし、どうしても盗らないつて云ふんだね。」

畜生、どうしてくれやうと思ひながら、三田は一枚々々札を勘定し始めた。

十の四

勘定した札は、不思議にも、一枚も減つてはゐなかつた。先刻一人で、人知れず數

へた時と同じだった。間違ひでは無いかと思つて、もう一度やり直して見たが、矢張り前と同じだった。

「ふうむ。盗りはしなかつたんだね。たゞ觸つて見ただけなのか。」

三田は歎息した。何かしら怖ろしい見えない力が、此のちいつほけな小娘に、屢々出来心を起させるのであらうと想像した。いつたん盗んだ物を、又元に戻したのに違ひ無いと思ふと、他人の心ではあるが、何とも云へない重苦しさで胸を壓して來るものが感じられた。三田の心は全く寂しくなつてしまつた。

「御免よ。盗つたに違ひ無いと思ひ込んだのは僕が悪かつた。」

唇を噛んで、泣くのを堪へようとして居る相手を見ると、愈々弱い心になつて、其の場にあるのも氣がとがめるのであつた。

「これは君に上げやう。」

皺くちやの十圓札をおれんの際の上に置いて、三田は壁にかゝつて居る帽子をひつ

ゝかむと、逃げるやうに廊下に出た。

残されたおれんは、其の札を汗ばんだ手の中に握つたまゝ、前かけに顔を埋めて泣いてゐた。どうなる事かと思つて居たのが、今日迄に毎度同じやうな場合に出つくわした責め折檻とは違つて、全くわけのわからない相手の態度が、いちじるしく心に泌み込んだ。何時でも悪心を起した後では、心を苦しめる事が多かつたが、今日は特別に感動して、せぐり上げる涙にむせびながら、永い間其の場に突伏してゐた。

「おれん、おれん。」

階下の方で、婆さんの呼び立てる聲に驚いて、いつたんは廊下に出たが、直に戻つて來て、皺くちやのまゝ涙に濡れた十圓札を三田の机の抽斗に入れて室を出た。

往來に出た三田は、自分の爲た事がいゝことか悪いことか思ひ迷つた。何となく芝居がゝつてゐるのが氣になつて仕方が無かつた。苛々した心持で、道端の石塊を蹴飛ばしながら田原と約束した場所に急いだが、新地に曲る角のところで、青黒いまるま

ると肥つたころあひの石を見つけて、方任せに蹴飛ばした拍子に、下駄はぼつくり缺けて、親指のあたる邊に力が入らなくなつた。風邪を引いたやうなうそ寒さを足下に感じながら、三田は自分自身のしわざに腹を立て、親指を蟻にして歩いた。賸貨の門を入つて、敷石の上を跛を引きながら、歩く時は愈々腹が立つた。

「お越し。お久しうおまんな。」

三田の方では覺えてゐなかつたが、先方ではよく承知してゐるやうな様子で、中回の顔に白粉の濃い仲居が出迎へた。

「おやまあ、新しい下駄をこないしやほつた。」

仰山な聲で、その缺けた方の下駄をつまみあげて、三田の目の前で振つた。

座敷には田原が待つて居た。卓の上に竹の皮包のまゝの今川焼が山盛りになつてゐて、彼はその一つをまるごと頬張つたところだつた。

「う、うむ、うまいぞ。三田公ひとつ喰へよ。たつた今往來で買つて來たんだ。」

極端な羞しがりのやの田原は、羞しくはないぞといふ所が見せ度くて、竹の皮を抱へて此の家に入つて來たのに違ひ無かつた。そんな事をして、逆手をうつた積りの友達のやり口が、三田はひどく不愉快だつた。

「どうしたんだ、遅かつたぢやないか。」

奴さん御機嫌斜だぞと思ひながら、田原は探りを入れて見た。

「うむ、途中で下駄が缺けたので、縁起が悪いなと思つたら、果して今川焼が待つてやあがつた。」

三田は厭味をいひながら坐つた。自分でも自分の不機嫌なのがよくわかつた。それは今川焼の爲めでは無く、下駄の爲めでもなく、矢張りおれんに十圓札をやつたのが、安つばい「白樺」末期の小説好みで不快だつたのだ。

酒が出ると、田原は直ぐに眞赤になつて、平生からの高調子が、一層高くなつて来た。下座敷には大藤五郎兵衛が来てゐると仲居が教へたが、そんな事には頓着無くその大五の大將を攻撃して止まなかつた。現在の勞銀の安過る事、勞働時間の不規則に長過る事、懐を肥す事の外には何も考へない株主の横暴——彼はこの頃毎日會社で論じ立てゝゐる自分の意見に、親しい友達の賛成を得度かつた。

「俺は自分の地位を賭しても職工の要求を通させてやる。」

平生からのお喋りを、酒の酔がおだてるので、羞しがりの一面は段々に影をかくして来た。それにひきかへて、三田は其晩は心が浮かなかつた。自分自身でもとがめる程、事毎に田原の所作が氣に入らなかつた。大道演説なら往來に出ると、怒鳴りつけてやり度いやうな氣持で、しかもそれだけの事を口にするのさへ面倒だつた。奴さん御機嫌斜めだな——田原はさう氣は付いたが、何故不機嫌なのか想像もつかなかつた。自分の酒の飲み振が悪いのかしらとも思つた。本來は氣の弱い質なので、威勢よく喋

りはしても、絶えず心に懸るのだつた。

「三田公。お前もちつとは喋ろよ。」

「まあ黙つてこの酒を味はつて見ろ。お客や藝者に飲ませるには惜いやうない酒だ。」

三田は盃の中の酒の色に目を細くして、心底から讚美した。

「えらい云はれやう。」

先刻から手持無沙汰に堪へ兼ねてゐた怖ろしく脊の高い、三十恰好の、青白い顔の女が、いゝ機会をつかまへたといはんばかり、膝を乗出して来た。客の一人はのべつに喋り、もう一人は黙つて酒ばかり飲んでゐるのを、伶俐な目で見てゐたのだつた。

「お客さんや藝者に飲ませるのが惜かつたら、誰に飲ませまんの。」

「下宿で一人で飲み度いんだ。」

さもうるさうに三田は答へたが、一座は一齊に陽氣な笑聲を立てた。さうして、



この思ひもかけなかつた笑聲の爲めに、室の中は俄に明るく、賑かになつた。藝者も口をきく機会が出来た。盃のとりやりも始まつた。就中田原は救はれた氣持で、一層はしやぎ出した。三田公は矢張りいゝ奴だなあ——彼は友達の手を取つて叫び度いやうな氣がして、とても黙つてはゐられなかつた。何のきつかけも無く、突然大きな聲で、聲色をつかつてやつた。

「扱ごんじりに控へしは、潮風荒き小ゆるぎの、磯馴の松の曲りなり……」

「高島屋あ。」

廊下から聲をかけて、葉牡丹が現れた。

「今晚は。」

何處かで飲まされた酒の色のあからさまなのが、美しい顔を一層艶めかしくして見せた。

「遅いなあ。待たせるぢやあないか。旦那でも来てゐたのかい。」

田原は傍にべたりと坐つた相手を見て、それが一生懸命の冗談をいつた。

「田原さんの逢狀貰うて駆け出して來よう思ひましたけれどなあ、こつぶのお酒を飲まん事には歸つたらあかんいはゝつてなあ……」

其のこつぶ酒を飲んだのであらう、帯の間から抜き出した小扇を胸のあたりで動かした。

「ふうむ、こつぶで飲まされたのかい。」

田原はひどく感激した物の言ひ方をした。

「あ、けなり。」

怖ろしく脊の高い三十女は、二人の様子を見てからかつた。

「あんなん見せつけられたらかなはん。藝者に飲ませたら惜いお酒を、私もこつぶで飲み度うなつた。」

手を叩いてこつぶを取寄せて、手酌でなみなみと満へたのを、伶俐さうな眼で電燈

の下で透かして見たが、長い首を稍仰向に口をつけると、たゞ一息に飲み干した。

「あんたは頼母しさうな顔してはる。ひとつあげまつさ。」

いきなり其のこつぶを三田の前に差しつけた。

## 十の六

「いやだ。僕は酒は飲むけれど、こつぶ酒は嫌ひだ。」

三田は苦々し氣に顔をしかめて手を振った。

「そんなむづかしい顔せんと飲みなれ。」

こつぶ酒を飲んで一層蒼白くなつた女は、琥珀の波を打つのを、三田の鼻さきに押つけて強ひた。

「ちえッ、うるさい蟬だなあ。」

一張羅の胸から膝にあふれさうなのを恐れて、三田も爲方無くこつぶを受けた。

「見事、見事。あんたの飲み振よろしいな。」

負けない氣に彌癪氣味もまじつて、ぐつと干した三田を、蟬は正面からほめた。

田原は田原で、ちつとばかりの酒に銘煎して、前後左右に體を動かしながら、外には藝が無いので、無闇に喋り續けてゐた。

「君にはほんとに逢ひ度かつたよ。逢つて何時かのお禮を云ひ度かつた。随分手數をかけたからねえ。」

正直者の田原は、會社の連中に盛りつぶされて、吐いたりもがいたりした時の事が絶えず頭腦に残つて居た。其の晩介抱して呉れた葉牡丹に、出来るものなら相當のお禮がし度かつたが、如何いふ風にして禮をしていゝものかわからない。金をやつていゝものならやり度かつたが、そんな事をするに相手が氣を悪くしはしまいかと、心配だつた。彼は酔つたまぎれにそんな事を繰返して喋つてゐた。

「ほんとにお禮をし度いんだがなあ。お金を貰つては呉れまいし……」

「何で私がお禮を頂きまんの。お客さんが酔うたのを介抱するのは藝妓の役目だんが。」

葉牡丹も過した酒に調子づいてゐた。

「あの二人は先刻から何云うてんね。お禮をするとか、貰はんとか。あんたも呉れるといふのなら貰うといたらえゝやないか。」

「あら、姐ちゃん。」

事情を知らない鱗は押問答をしてゐる他人が小じれつたかつた。

「そないな事云はんと飲みいな。」

半分ばかり残つてゐたこつぶの酒を飲み干して、田原の前に差しつけた。

「よせよ。もう總會も済んだんだから、今更田原を酔はしたつて爲方が無いや。」

三田は鱗の傍若無人なのが面憎くかつたと同時に、又田原を酔ひつぶすのは見るに忍びなかつた。

「おい、こつぶなら僕が引受けるよ。そつちは浮名を立てた同士だ。何時迄もいちやつかせて置くさ。」

彼は食卓の上に半身乗出して、田原の前のこつぶを取つた。

「しかし田原位果報な奴も無いよ。たつた一杯か二杯のこつぶ酒を飲んで、ぶつ倒れて吐いたおかげで、葉牡丹さんには徹宵介抱して貰ふし、蛸配當にはありつくし……」

いゝ機嫌なのか怒つてゐるのか、三田は毒口をさゝながら、一寸苦い顔をしたが、思ひ切つた形で、又しても一息にこつぶを干した。

「えらいやつちや、えらいやつちや。」

鱗は悦に入つて、三田がこつぶを下に置く間も無く、又とくくと徳利の口を鳴らして酌いだ。

「なんでえ、なんでえ。藝の無い奴が酒ばかり飲んでゐやあがら。俺だつてこつぶ位平氣だぞ。」

田原はもう呂律が廻らなくなつてゐたが、こつぶを取らうとあせつて手を出した。「よせつたらよせ。いくらこつぶで飲んだつて、上半期の蝟配には間があるせ。」

「なんだと。」

田原は何を思つたか、危ない體つきで立上つた。

「やい三田公。晦日に月の出る廊も、間があるから、覚えてゐろ。」

「橋屋あ。」

細長い脛を出して、大きく疊を踏む積りだつたが、體の自由が利かないので、空を踏んで前のめりによろけかゝつた。

「あれえ。」

二三人の金切聲がきつかけで、田原は投出された形で、廣い座敷の真中に倒れた。

「うむ、もう目が見えない。」

それつきり甎をかいて寝てしまつた。

十の七

夜が更けるに従つて、蟬は益々こつぶ酒をあふり、あふればあふる程顔色は蒼ざめて、誰が何と云つても、自分の云ふ事の外はきかなくなつてしまつた。

「おい三田公。もつと飲みませうよ。あんたが一杯飲んで、あてが一杯飲んで、又あんたが飲んで、あてが飲んで……」

「駄目だよ。僕はもう飲めない。第一こつぶ酒はうまくないや。」

「あんたはうまく無くてもあてはうまい。さ、男らしう飲みなはれ。」

何時迄も何時迄も、しつこくこつぶ酒を強ひるばかりだつた。外にも入替つて二人の藝者が並んでゐたが、みんな此蟬の暴れ廻るのに辟易して、一人減り二人減り、やがて一人も姿を見せなくなつてしまつた。葉牡丹の膝を枕に、犬の字になつて寝てゐる田原の甎ばかりが、際立つて高く聞えた。

「さ、飲めというたら飲みなはれ。私は飲まん人は嫌ひやわ。」  
酒が無くなると手を鳴らして呼んで、鱗は鬪武々に酔ひながら、すつかりいゝ氣  
持で落ついてしまつた。

「よし、それぢやあお互に一杯づゝ乾杯して納めよう。君の方は兎に角、僕は明日の  
勤のある體だ。」

かなり酒には強い三田も、幾杯と無く飲まされたこつぶ酒が身内に溜つて、蒸され  
るやうに暑く感じて來た。じつと坐つて居ればだけれど、若しも立上りでもしやうも  
のなら、田原と同じ運命では無いかと思はれて不安心になつて來た。

「へえ、あんたみたいなしよむ無い人にもお勤おまんのか。あつたかてかめへん。飲  
みなれ、飲みなれ。」

又してもこつぶを三田の鼻先に押しつけて、無理にも飲ませようとするのだつた。  
「それぢやあこれでおしまひだよ。」

念を押して、三田は目をつぶつて飲んだ。

「よろしい、流石は三田公や、其處で今度はあての番だつせ。」

「姐ちやん、もうやめんとあさまへんせ。」

眠さうな顔をして、膝の上に重たい田原の寝顔を羨ましがつてゐた葉牡丹も、見る  
に見兼ねてとめてみたが、鱗は一層勢ひづいて、

「あてと三田公は夜あかして飲みまんのや。——暑い、暑い、足袋脱いだろ。」

流石に酒氣に堪へ難くなつて、長い足を横に投出すと、ひとつづゝ足袋を脱いで、  
座敷の隅を目がけて投げた。男の穿きさうな大きな足袋は、人氣の無い一隅に、はな  
ればなれに飛んで落ちた。

「ついでに帯も取つてやろ。」

坐つたまゝで、するする解いて、細長い胴中に喰ひ入つてゐる伊達巻ひとつになつ  
た。

「お尻もからげたる。」

見上げるやうな脊の高いのがふらふら立上つて、着物をくるりとまわると、腰から下ははでな長襦袢になつた。

「さてこれから夜あかしで飲みまんのや。」

目の前のこつぷに酒をみたすと、咽喉を鳴らして干した。

十の八

「僕はもう歸るよ。」

最後に三田が、強ひられるこつぷを振拂つて立上らうとしたのは、十二時を過ぎた頃だつた。

「歸つたらあかん。あてが寂しなる。」

鱗は素早く三田の胸ぐらを両手でつかんで引据ゑた。

「今夜は夜あかしやいうた以上は男らしう夜あかししたら如何だつたか。それともあんな飲み負けたのか。」

「あゝ、負けたよ。鱗と競争する氣は毛頭ない。第一夜あかしだ。夜あかしだと怒鳴つてゐるのは君だけで、僕は勤のある體だから、うちに歸つて寝たいんだ。」

「あかん、あてが歸さん。」

「歸さん云うたかて歸る。」

三田は鱗の我儘な、傍若無人の醉振に、少しの厭味もまじつてゐないのが存外氣に入つて、しつこく引留められてもいゝ機嫌で、下手な大阪言葉を真似する丈の氣持は残つてゐた。

「おい、三田公。歸るのか。」

何時の間にか目をさましてゐたと見えて、田原がむつくり頭を持上げて、大きなあくびをした。

「あゝ歸るよ。一緒に歸らう。」

「あかん。歸さん云うたら歸さん。」

「歸るいうたら歸る。」

「そんならもう一杯飲んでお歸り。」

たつた今三田が振拂つた拍子に疊に落ちて轉がつたこつぶを拾つて、蟒は其處いらに林立してゐるお銚子を、一本々々逆さまにして、やうやくいつばいにした。

「よし、面倒臭いから飲んでやる。そのかはりこれつきりだぞ。」

三田はいきなりこつぶを口に持つて行つた。

「一寸待つて。あんたが一人で飲んだら寂しい。あても一緒に飲みまつさ。」

手を叩いて女中を呼ぶと、餘り度々の事なので、氣を利かして兩手に一本づゝ徳利を持つたおちよぼが、眠さうな顔をしてやつて來た。

「さ、よろしいか。乾杯だつせ。」

二つのこつぶをふれ合せて、三田も蟒も先を争つて飲干した。

「左様なら。おい田原歸らう。」

こつぶを下に置くと、三田は傍にあくびばかり連發してゐる友達を促して立たうと  
した。

「歸つたらあかん。」

又しても蟒は三田の胸ぐらを取つて引据ゑた。

「まだ此處に一本残つたるやないか。も一度乾杯せん事には氣色が悪い。」

「そんな事を云つては切りが無い。最後だつていふから今飲んでやつたんぢやないか。もう何てつたつて飲まない。」

あんまりしつつかいので三田も腹が立つた。此處いらで意地張らなくてはみつとも  
ないといふやうな氣もした。

「もういゝ加減に許してやれよ。餘りくどいと三田公が疝癩起して亂暴するからね。」

あいつは裏力があつてあばれると始末が悪いんだ。」

田原も早く引上げ度いので、立つて来て、鱗の肩を叩いた。

「うるさい。あんたみたいな男に用はない。あての相手は三田公や。なあ、三田公。」  
まるつきり蒼ざめて、目は坐り、口はしまりが無くなり、體は自由が利かなくなつてしまつた。

「姐ちやん、そない飲みはつたら毒だつせ。」

葉牡丹も寄つて来て引留めたが、

「うるさい。」

と叱りつけて、鱗は三田の胸にかけた手をはなさうとはしなかつた。

## 十の九

「おい、此の手を放して呉れ。飲み過ぎてゐるところを、押へられては堪らないや。」

三田は力任せに女の手を胸から引放した。

「いつたん飲まないと云つた上は断じて飲まない。なんてつたつて飲むもんか。」

「よろしい。どうしても飲まんのやつたら、此のお酒をあんたの頭からぶちあける。」  
力づくではかなはないとは知つてゐても、負け度くないのが此女の性分らしかつた。  
いきなり徳利を引つかむと、さもぶつかけさうな勢ひで立上つた。何てつたつて負けるもんかと云ひ度さうな其様子が面憎く、三田は鱗を突飛ばしてやらうかと思つたが、まさか亂暴もしまい、かけるならかけて見ろと云つてやつたら、かへつて手のやり場が無くて困るだらうと、横着な事を考へてゐた。

「さ、飲むか。飲まんと頭からぶつちやける。」

足下がきまらないので、自分の裾を踏むまいとすればする程ふらふらする大女を、

三田はからかひ面で見守つた。

「何てつたつて飲まないよ。ぶつかけたつて飲むもんか。」



言葉が終るか終らないうちに、三田の頭から熱い酒が容赦なく落ちて来た。浴びせられながら、三田は醉眼を閉じて腹をきめた。なまじ騒ぐのはみつともない、思ふさま酒びたしになつてやらう。此の場合おちつき拂つてゐる事が、ひどく立派な態度らしく考へられた。

「まあ姐ちゃん。ごないしたらえゝのやろ。」

葉牡丹は泣出しさうな顔をして、袂から手巾を取出して立騒いだが、間もなく酒は畢も残さず、すつかり三田を濡らしてしまつた。

「ひでえ事をしやあがつたなあ。」

田原があきれてつぶやいただけで、座敷の中はひつそりした。鱗は思ひ切つてやつた仕事に、何の反應も無い手持無沙汰に惱んで、呆然と立つてゐた。

「もう歸つても文句はないだらうね。」

暫時たつて三田が云つた。鱗は何とも答へなかつた。

「おい、歸らう。」

三田は田原に目くばせして立上つた。襟首から脊中に傳はつて入つた酒が、氣味悪く襦袢を肌にあひつかせ、胸から膝はぐつしより濡れて、むんむと蒸る酒の臭が、目を刺すやうに立昇つた。しつかりして居る積りだつたが、立上るとひどく酔つてゐるのがわかつた。三田は自分の足につまづきさうな足取りで廊下に出た。

「三田さん、あても一緒に行く。」

突然鱗は後から追ひ縋つて、梯子段の所で三田が外套をはをつてゐる袖を捉へた。

「姐ちゃん、危ないわ。」

取違つた方も縋られた方も、體中に廻つた酒に絶えず足をすくはれ通して、滑かに拭き込んだ廊下は危険だつた。

「ほんとに危ないから放して呉れ。」

口では優しく云ひながら、三田はもう一切が面倒臭くなつてゐた。力任せに女の手

を振切ると、葉牡丹の手の帽子を引つゝ、かんで段梯子を下りた。一段下りたと思つた時、

「あても一緒に行く。」

振放されて廊下に膝を突きさうになつた鱗が、又しても負けん氣を出して、猛然として外套の肩をつかんだ。

「危ないつたら。」

殆どそれと同時に落ちた。三田は鱗の足が裾を踏んでゐるとは知らないで、又一段下りる積りだつたが、足は自由に延びないで、空を踏むと、しまつたと思ふ間も無かつた。後の女も裾を踏んでゐるとは氣が付かなかつたから、いきなり前に出られたので中心を失つた體全體で、三田を頼みに縋りついた。づうんと頭が冷くなつた。たつた一瞬間の事だが、夕方此處に来る時、新地の曲角で青黒いまるまると肥つた石を蹴飛ばした景色が目には浮んだ。

落ちて行く、落ちて行く、さう思つただけで、梯子段にぶつかりながら、ひしと女と抱合つたまゝ墜落した。三田はそれつきり意識を失つてしまつた。

### 十一の一

城西館では、ついぞ外泊した事の無い三田が、翌朝になつても、晝が過ぎても歸つて來ないので不思議がつてゐたが、其の晩夜食の後始末も濟ませて、みんながあかりの下に集まつてゐるところへ、酒屋のおかみさんが夕刊を持つて駆け込んで來た。

「えらいこつちや。あんたどこの三田さんが、えらい怪我さゝれはつた。」

おかみさんは驅出して來たので、息が苦しくて言葉を續ける事が出來なかつた。

「何でえな。」

婆さんが夕刊を引たくつて擠げると、亭主も女房もお梅もおれんも、藪呪の女の子迄首を差延ばしてのぞき込んだ。

「現代式會根崎心中」といふ大標題の横に、「小説家樟喬太郎茶屋の二階より蹴落され  
て瀕死の重傷」と二行に割つた小標題が、又一同を驚かした。

月も朧の春の夜は、隣家の玉も裏の三毛も、相手欲しさに浮かれ歩く、ましてや人  
間の中でも常日頃、色と戀とを賣物の小説商賣、たゞ一管の筆先で、嘘八百を並べ  
立て、稼ぎためた原稿料で、ほかほか懐が温たまれば、新地あたりの白粉の香に慕  
ひ寄るのも無理はあるまじ——と書いても誰の事かわかるまいから、デモクラシイ  
の世の中だ、現代式に手取早く底を割れば、目下某紙に長編小説「世相」を執筆し  
てゐる樟喬太郎が、昨夜會根崎新地のさる席貸の二階から突落されて瀕死の重傷を  
負つたと御承知あり度い。しかも一人では無い。すべての事件の裏面には女がゐる  
といふ諺の通り、××席の葉牡丹と云ふ開花正に關する美妓と抱合つて轉んだ——  
否蹴飛ばされたのだからお安く無い。即ち記者が現代式會根崎心中と題した所以で  
ある。……

「へえ、三田さんがお茶屋の二階から落ちて怪我しはつたのんか。」

のぞき込んで聽いて居た亭主が、意外な事だといふやうにつぶやいた。

「落ちはつたんや無いのやせ。他所の男にどづかれて落されたんやさうな。」

酒屋のおかみさんは自分の智識をほこり顔に訂正した。

「まあ黙つて聽いてたらえ。」

婆さんは聲を立てて讀んで居るのを邪魔されたのが不平で、たしなめた。

さて蹴飛ばされたのは小説家先生と、其の馴染の女どわかつたが、然らば蹴飛ばし  
たのは誰かと云ふに、驚く可しこれが樟の學校友達で、今は某車輛會社の重役某氏  
に外ならないのだから、其處には何か人知れぬ、いはれ因縁が無くてはならない。

いざや之より戀愛三角關係を説き明かさん。……

「あてはなあ、その重役さん云ふ人が、よう三田さんどこに見えた社長さんやないか  
と思よ。」

酒屋のおかみさんは黙つて聽いては居られない程、好奇心にみちみちてゐた。

「左様か。あのやうに仲善うしてゐやはつたがなあ。わからんもんやなあ。」  
宿の女房は直ぐに同意して、感慨深さうに云つた。

「其處が女の事やもん。親子兄弟でも喧嘩になるのやよつて。」

亭主も言葉を添へて、新聞の記事が人間の世の中をそのまゝ見せて呉れたやうな氣持で、何の疑ふところもなかつた。

話半途におもてにけたましい自動車の音が聞えて、誰か來たなど思はず一同が顔を見合せた時、

「今晚は。」

と大きな聲で玄關に立つたのは、今の今噂にのぼつてゐた田原だつた。帳場の者は緊張した心持で、もう一度顔を見合せた。

## 十一の二

婆さんに目くばせされて、取次に出たのはお梅だつた。

「お越し。」

これが三田を二階から突落した人間かと思ふと、随分馴染になつてゐた田原ではあるが怖ろしかつた。

「一寸お使に來たんだが、三田公の着換と、寝巻と、外に身の廻りのものを少し欲いんだ。僕を三田公の室に通して呉れば用は済む。通つても構ふまいね。」

田原はおちつきの無い性急な口をきいて、既に下駄を脱いで上つてゐた。お梅は何と返事をしたものか、愈々怖くなつてもじもじするばかりだつた。

「今晚は。社長さんだつか。」

帳場で様子をうかがつて居た婆さんは、お梅ではいけないと見て取つて、讀みかけ